ゴーランド・コレクション調査研究報告書　第１号

兵庫県宝塚市

白鳥塚古墳・山本古墳群

－ゴーランド調査古墳の研究 1 －

ゴーランド・コレクション調査プロジェクト

2017年３月

例　言

1．本書は、ウィリアム・ゴーランドが調査を行った兵庫県宝塚市白鳥塚古墳と山本古墳群および大英博物館所蔵の関連資料の研究報告書である。

2．本研究報告書は、平成24年度～26年度科学研究費助成金基盤研究（B）「ゴーランドの古墳研究の総合的検証と古墳文化に対する国際的理解への活用」（課題番号：24320160　研究代表者：一瀬和夫）、平成27年度～30年度科学研究費助成金基盤研究（B）「ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築」（課題番号：15H03270　研究代表者：一瀬和夫）の研究成果の一部である。

3．白鳥塚古墳の現地調査は富山直人（神戸市立図書館）、森下章司・岡本篤志・西村秀子（大手前大学史学研究所）、林弘幸（大手前大学大学院）が実施した。調査において、大本山中山寺、足立泰教氏（中山寺総務次長）、吉田健一氏（宝塚市教育委員会）に格別な協力を賜った。白鳥塚古墳の報告中、①方位は磁北、②高度は海抜高を示す。

4．白鳥塚古墳と山本古墳群に関するゴーランドの調査資料および採取遺物は大英博物館の所蔵品であり、ゴーランド・コレクション調査プロジェクトチームが調査した。大英博物館での調査の協力者は第Ⅰ章に記してある。

5．今回掲載する大英博物館所蔵資料の写真については The British Museum 所蔵と記してある。白鳥塚古墳の写真は寿福写房・寿福滋氏による。

6．白鳥塚古墳の調査およびゴーランド資料に関しては奥田智子（大手前大学史学研究所）・富山、山本古墳群の資料については前田俊雄（橿原考古学研究所）が中心となってまとめた。本書の編集は森下の指導のもと、奥田が担当した。

目　次

例　言

目次・挿図目次・表目次

第Ⅰ章　白鳥塚古墳・山本古墳群とゴーランドの調査

1　調査・研究の経緯 …… 森下章司　1
2　白鳥塚古墳と周辺古墳 …… 奥田智子　4
3　ゴーランドの調査 …… 森下章司・奥田智子・富山直人・前田俊雄　6

第Ⅱ章　白鳥塚古墳の調査と成果 …… 奥田智子・富山直人　13

1　今回の調査 …… 13
2　調査の成果 …… 14
（1）　横穴式石室と家形石棺 …… 14
（2）　横穴式石室の石積みの特徴 …… 19
（3）　家形石棺 …… 22
（4）　まとめ …… 27

第Ⅲ章　白鳥塚古墳と山本古墳群の分析

1　白鳥塚古墳の位置付け …… 奥田智子　28
（1）　白鳥塚古墳の横穴式石室と家形石棺の構造と年代 …… 28
（2）　横穴式石室の規模の比較 …… 30
（3）　横穴式石室の構造の比較 …… 31
（4）　白鳥塚古墳の位置付け …… 32
2　山本古墳群出土の陶棺 …… 前田俊雄　33
（1）　山本古墳群出土陶棺 …… 33
（2）　出土地の検討 …… 34
（3）　まとめ …… 36

第Ⅳ章　まとめ …… 奥田智子　37

挿図目次

図１　入口からみた白鳥塚古墳石室（寿福撮影） …… 4
図２　西摂平野と白鳥塚古墳（カシミール3D で岡本・奥田作成） …… 5
図３　西摂平野・大阪湾と白鳥塚古墳（カシミール3D で岡本・奥田作成） …… 5
図４　周辺の古墳（地図は参謀本部陸軍部測量局1887　奥田作成） …… 6

図５　ゴーランドの白鳥塚古墳の記録　写真・120（The British Museum 所蔵、富山撮影）…… 7
図６　ゴーランドの白鳥塚古墳の記録　122・124（The British Museum 所蔵、富山撮影）…… 8
図７　ゴーランドの白鳥塚古墳の計測図　（富山・奥田作成）…… 8
図８　ゴーランドの山本古墳群の記録　Yamamoto 1・2（The British Museum 所蔵、富山撮影）…… 9
図９　ゴーランドの山本古墳群の記録　Yamamoto 3・無番号（The British Museum 所蔵、富山撮影）… 10
図10　ゴーランドの山本古墳群の計測図　Yamamoto 2・3（前田作成）…… 11
図11　白鳥塚古墳の実測図（梅原1930　直宮2013）…… 13
図12　SfM による白鳥塚古墳の放射輝度陰影図（岡本・奥田作成）…… 15
図13　横穴式石室と家形石棺の各部名称（岡本・奥田作成）…… 16・17
図14　横穴式石室と家形石棺（富山・奥田作成）…… 18
図15　奥壁と玄室側壁（岡本・奥田作成）…… 19
図16　玄門と玄室側壁（岡本・奥田作成）…… 19
図17　右側壁（岡本・奥田作成）…… 20・21
図18　左側壁（岡本・奥田作成）…… 20・21
図19　右側壁（羨道開口部側）（岡本・奥田作成）…… 22
図20　左側壁（羨道開口部側）（岡本・奥田作成）…… 22
図21　家形石棺（富山作成、寿福撮影）…… 22
図22　羨道と玄室（寿福撮影）…… 23
図23　玄室と家形石棺（寿福撮影）…… 24
図24　玄門と羨道（寿福撮影）…… 25
図25　羨道（寿福撮影）…… 26
図26　家形石棺（寿福撮影）…… 26
図27　白鳥塚古墳と長尾山丘陵の横穴式石室（奥田作成）…… 28
図28　大和の大型横穴式石室（奥田作成）…… 29
図29　横穴式石室の規模の比較（奥田作成）…… 30
図30　山本古墳群出土陶棺片実測図（The British Museum 所蔵、前田作成）…… 33
図31　山本古墳群出土陶棺片写真（The British Museum 所蔵、森下撮影）…… 33
図32　『酔古雑録』（坪井1914）…… 35
図33　天満神社古墳石室実測図（関西学院大学考古学研究会1991）…… 36

表 目 次

表１　ゴーランド石室一覧表（Gowland1897）…… 11
表２　ゴーランドの白鳥塚古墳の横穴式石室・家形石棺の計測値との比較（奥田作成）…… 27
表３　白鳥塚古墳と大和・長尾山丘陵の横穴式石室属性表（奥田作成）…… 31
表４　横穴式石室の計測値の比較（前田作成）…… 36

第Ⅰ章　白鳥塚古墳・山本古墳群とゴーランドの調査

1　調査・研究の経緯

ウィリアム・ゴーランド（William Gowland）は明治５～21（1872～1888）年の16年間にわたり、お雇い外国人として日本に滞在し、その間、日本各地の古墳を中心とした遺跡の調査と研究に精力的に取り組み、日本考古学の黎明期に活躍した人物として著名である。調査と研究成果は帰国後に論文として発表され、ヨーロッパの学界の注目を浴びた。また滞在中に得た大量の考古資料をイギリスに持ち帰り、それらは後に大英博物館の所蔵品となった。

ゴーランドの調査研究内容や大英博物館の所蔵資料は日本の学会でも早くから注目され、紹介・検討がなされてきた。執筆論文については翻訳本が刊行され（上田校注 / 監修・稲本訳1981）、また大英博物館所蔵資料については後藤和雄氏がヴィクター・ハリス氏と共にまとめた『ガウランド　日本考古学の父』に多数の写真が掲載され、その全貌が明らかにされた（ハリス・後藤編2003）。そのほか大塚初重（大塚1977）、池上悟（池上2004）、富山直人（富山2009a・b）の諸氏が個別に資料を提示している。

これらの成果をふまえつつ、一瀬和夫を代表とするゴーランド・コレクション調査プロジェクトのチームを立ち上げた。目的は、①大英博物館所蔵ゴーランドの古墳関係資料の実測・撮影など悉皆的調査、②ゴーランドが日本で調査した古墳の再調査・検討、③ゴーランドの調査・研究方法の学史的位置づけ、④以上を総合した古墳時代研究への活用、⑤大英博物館ほか諸機関との共同による調査研究成果の国際・国内発信、パブリック・アーケオロジーの実践である。

大英博物館の許可のもと、平成23年より所蔵資料の本格的な調査を開始し、毎年の訪英により、可能な限り全点を実測・写真撮影する作業を行った。また鹿谷古墳群および橿原丸山古墳をはじめとして、国内の関連遺跡・資料の調査も並行して進めた。平成24年度～26年度、平成27年度～30年度には科学研究費助成金を受け、調査はさらに進展した。

調査・研究と並行して日英両国でワークショップや研究会・展示会を開催し、また研究成果をまとめたリーフレット、個別論文・報告を刊行した。チームのメンバー、協力者は以下の通りである。

こうした活動を進める中で、ゴーランドが調査した兵庫県宝塚市白鳥塚古墳と山本古墳群に対して再検討を行い、成果をまとめたものが本報告書である。

【ゴーランド・コレクション調査プロジェクト】

調査研究メンバー　　所属は2017年３月現在のもの

一瀬和夫（京都橘大学文学部）、菱田哲郎（京都府立大学文学部）、富山直人（神戸市立図書館）、森下章司（大手前大学総合文化学部）、忽那敬三（明治大学博物館）、諫早直人（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）、前田俊雄（奈良県立橿原考古学研究所）、塚本敏夫（財団法人元興寺文化財研究所）、土屋隆史（宮内庁書陵部）、岡本篤志（大手前大学史学研究所）、西村秀子（大手前大学史学研究所）、金宇大（京都大学）、宮川禎一（独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館）、松田陽（東京大学文学部）、竹村亮仁（財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）、片山健太郎（京都大学大学院）、佐々木憲一（明治大学文学部）、小川裕見子（大阪府教育委員会）、高橋照彦（大阪大学文学部）、日高慎（東京学芸大学教育学部）、山田俊輔（千葉大学文学部）、初村武寛（財団法人元興寺文化財研究所）

研究協力者

ティモシー・クラーク（Timothy　Clark　大英博物館・アジア部日本セクション）、ニコル・クーリッジ・ルマ

ニエール（Nicole Coolidge Rousmaniere 大英博物館・アジア部日本セクション・キュレーター・セインズベリー日本藝術研究所）、サイモン・ケイナー（Simon Kaner イーストアングリア大学日本学センター・セインズベリー日本藝術研究所）、内田ひろみ（元大英博物館プロジェクト・マネージャー）、土屋範子（大英博物館・三菱商事キュレーター）、矢野明子（大英博物館・三菱商事キュレーター）、ルーク・エジントン－ブラウン（Luke Edgington-Brown イーストアングリア大学・大英博物館共同博士号候補生）、ステファニィー・サンチ（Stephanie Santschi イーストアングリア大学）、吉田泰幸（金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター）、サム・ニクソン（Sam Nixon セインズベリー日本藝術研究所）

主な調査

大英博物館所蔵資料調査（2011年２月28日～３月４日、2012年２月27日～３月２日、2013年３月４日～３月８日、2013年８月15日～８月21日、2014年３月17日～３月21日、2014年８月４日～８月８日、2015年３月16日～３月20日、2016年３月11日～３月18日）

京都府亀岡市鹿谷古墳群測量調査、奈良県橿原市橿原丸山古墳測量調査、兵庫県宝塚市白鳥塚古墳測量調査、京都市甲塚古墳測量調査

ワークショップ・シンポジウム

2011年11月20日：鹿谷古墳群講演会（鹿谷公民館）

2012年３月３日：ワークショップ「William Gowland Workshop, sponsored by the British Museum(BM) and Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures(SISJAC)」（大英博物館・サックラー室）

2013年８月16日：セミナー「Public Seminar William Gowland:' The Father of Japanese Archaeology' Oyatoi-Gaikokujin and the Modernisation of Japan.'」（The Japan Foundation, London）

2013年10月19日：大垣（美濃赤坂）調査、研究会

2014年９月６日～28日：企画展「ウイリアム・ガウランドと明治期の古墳研究」（明治大学博物館）

2014年９月20日：シンポジウム東京編「古墳研究のさきがけ・ガウランドを考える－これまでの研究成果と大英博物館所蔵資料に関する新知見－」（明治大学駿河台キャンパス・アカデミーコモン）

2015年９月19日：ワークショップ出雲編「山陰古墳研究の黎明－近代考古学研究の父・英国人ガウランドの足跡－」（古代出雲歴史博物館）

2016年３月19日：ワークショップロンドン編「Official Workshop Treasures from the ancient Japanese mounded tombs:current research on the Gowland Collection」（大英博物館・サックラー室）

2016年５月29日：日本考古学協会第82回（2016年度）総会研究発表「大英博物館ゴーランド・コレクション京都府鹿谷古墳出土馬具の調査」（東京学芸大学小金井キャンパス）

2016年６月18日：ワークショップ京都編「大英博物館所蔵ゴーランド・コレクション調査プロジェクト」（キャンパスプラザ京都）

主な出版物　（　）内は執筆者

○リーフレット

2015年　『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』（富山、西村、竹村、前田、菱田、土屋、金、諫早、森下、一瀬・荒木、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト）

2016年　『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』（ニュースレター１号）（竹村、富山、西村、忽那、富山、岡本）

2016年 『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』（ニュースレター２号）（一瀬、宮川、諫早、岡本、菱田）

○特集　ゴーランド・コレクション調査ＷＳ報告

2012年 『古代学研究』196（一瀬、森下、前田、土屋、富山、菱田、忽那）

2013年 『古代学研究』197（ケイナー、西村、竹村、富山）

2014年 『古代学研究』203（前田、富山）

2014年 『古代学研究』204（富山、金、諫早・片山）

2015年 『古代学研究』206（富山・笹栗、富山）

2015年 『古代学研究』207（富山）

2016年 『古代学研究』209（一瀬・富山・前田）

○京都橘大学文化財調査報告（京都橘大学文学部）

2012年 「橿原丸山古墳墳丘測量調査」（荒木瀬奈）

2012年 「鹿谷古墳群墳丘測量調査」（荒木）

2013年 「橿原丸山古墳測量調査」（一瀬・荒木）

2013年 「鹿谷古墳群大市・茶ノ木山支群墳丘測量調査」（荒木）

○その他

竹村亮仁　2015 「ロンドン古物学協会ゴーランド・ノートと大英博物館ゴーランド・コレクションとの比較・照合」『京都橘大学大学院研究論集　文学研究科』第13号、京都橘大学大学院、pp.1-133

一瀬和夫・岡本篤志　2016 「大英博物館所蔵ゴーランド・コレクションの埴輪調査」『京都橘大学大学院研究論集　文学研究科』第14号、京都橘大学大学院、pp.1-15

引用・参考文献

池上　悟　2004 「大英博物館所蔵のゴーランド・コレクションについて」『立正考古』第41号、立正大学考古学研究会、pp.7-23

上田宏範（校注 / 監修）・稲本忠雄（訳）　1981 『日本古墳文化論－ゴーランド考古論集』、創元社

大塚初重　1977 「大阪府芝山古墳の出土遺物をめぐる諸問題」『考古論集』、松崎寿和先生退官記念事業会、pp.313-334

後藤和雄　1997a 「ウイリアム・ガウランドの業績（1）－発掘した一世紀前の古墳写真－」『月刊　考古学ジャーナル』№412、ニューサイエンス社、pp.42-46

後藤和雄　1997b 「ウイリアム・ガウランドの業績（2）－天皇陵の出土品など300点－」『月刊　考古学ジャーナル』№417、ニューサイエンス社、pp.40-45

後藤和雄　1997c 「ウイリアム・ガウランドの業績（3）－コレクションの全貌と今後の発見－」『月刊　考古学ジャーナル』№420、ニューサイエンス社、pp.38-43

後藤和雄・忽那敬三　2008 「ウイリアム・ガウランドと上野博物館」『明治大学博物館研究報告』第13号、明治大学博物館、pp.1-26

富山直人　2009a 「ガウランドと鹿谷古墳－大英博物館所蔵資料の調査から」『日本考古学』第28号、日本考古学協会、pp.41-54

富山直人　2009b 「芝山古墳の遺物出土状況からみた横穴式石室の利用実態」『古代学研究』第184号、古代学研究会、pp.38-48

富山直人　2012 「ゴーランドとナウマン」『古代学研究』第194号、古代学研究会、pp.28-31

ハリス , ヴィクター・後藤和雄（編）　2003 『ガウランド　日本考古学の父』、朝日新聞社

Gowland, W., 1897. The Dolmens and Burial Mounds in Japan. *ARCHAEOLOGIA*, Vol.LV, pp.439-524

2　白鳥塚古墳と周辺古墳

白鳥塚古墳（中山寺古墳）は兵庫県宝塚市中山寺２丁目の中山寺境内に所在する。大型の横穴式石室に竜山石製の刳抜式家形石棺をおさめた古墳で、その存在については古くから知られていた。

北摂山地の長尾山丘陵の南へ延びる尾根の先端部に位置しており、西部には六甲山地が連なり、南部には大阪湾に面する西摂平野が眺望できる（図２・３）。西側を武庫川が、その東側を猪名川が南流する。

この地域では前期から古墳が築かれている。ここでは白鳥塚古墳が所在する長尾山丘陵周辺の主要な古墳をとりあげて述べたい（図４）。

前期・中期の古墳　長尾山丘陵の南斜面に築造された長尾山古墳（福永編2010・2011）や万籟山古墳（直宮1975）、武庫川左岸の平野部に築かれた安倉高塚古墳（武藤・橋本1977）などが著名である。長尾山古墳は前期に築造された墳丘長54ｍの前方後円墳で、粘土槨を埋葬施設とする。それに続く万籟山古墳は墳丘長54ｍの前方後円墳であり、長さ6.8ｍの竪穴式石槨をもつ。万籟山古墳のすぐ北の八洲嶺の最高所に竪穴式石槨を有する円墳らしい八洲嶺古墳があるが、詳細は明らかではない（武藤・橋本1977）。安倉高塚古墳は竪穴式石槨から呉の「赤烏七年」の銘をもつ鏡が出土した。このように長尾山丘陵周辺では前期の首長墓が存在する一方、中期古墳の顕著なものは認められない。

後期・終末期の古墳　長尾山丘陵の北東端では６世紀前半に、墳丘長41ｍの前方後円墳・勝福寺古墳（寺前・福永編2007）が築かれる。初期段階の横穴式石室があり、前方部には木棺直葬が設けられる。一方で、長尾山丘陵の南斜面にも古い段階の横穴式石室をもつ雲雀丘古墳群Ｃ北支群４号墳（関西学院大学考古学研究会1979、直宮1980）がある。

その後は、６世紀の後葉から７世紀にかけて、雲雀丘古墳群（関西学院大学考古学研究会1978・1979、直宮・坂井1980）、雲雀山東尾根古墳群（石野1971、岡田・岡野・折井1975、直宮・坂井1980）、雲雀山西尾根

図１　入口からみた白鳥塚古墳石室

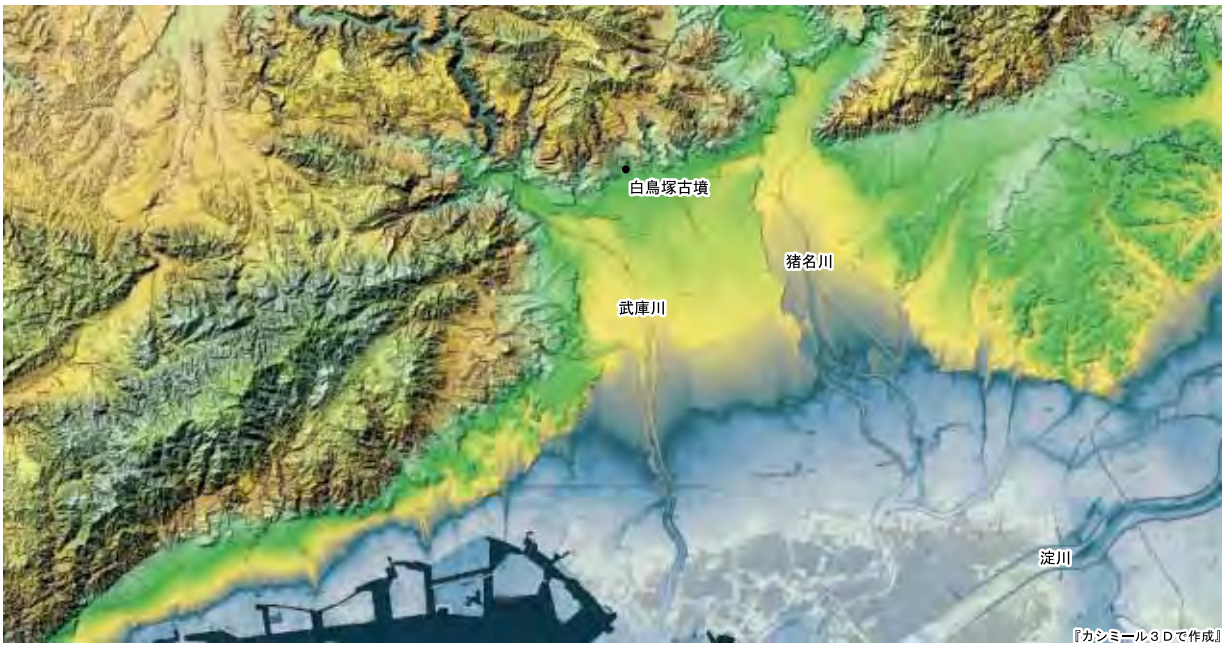


図２　西摂平野と白鳥塚古墳

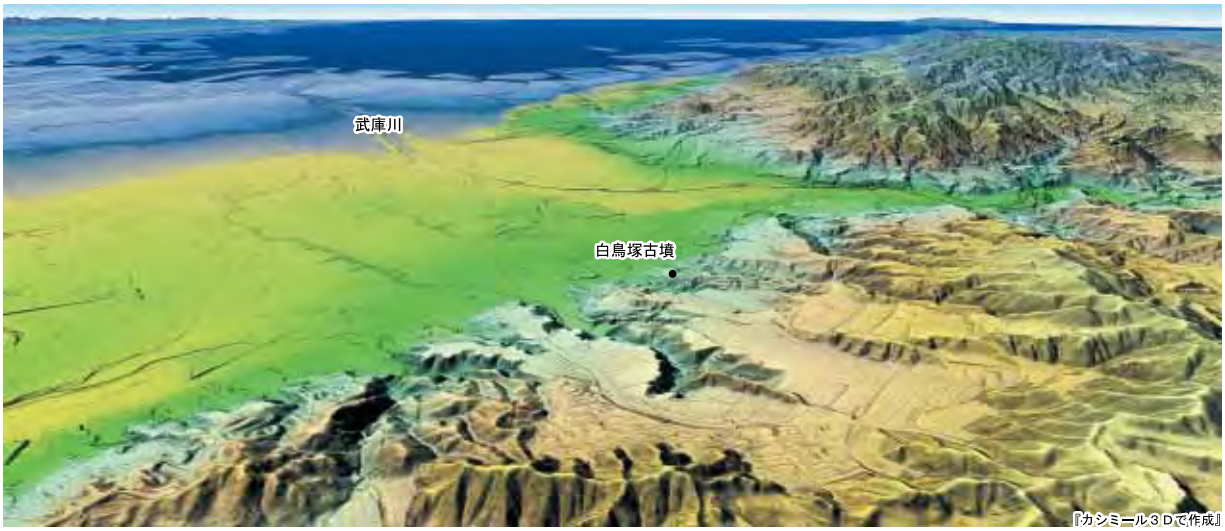


図３　西摂平野・大阪湾と白鳥塚古墳

古墳群（岡田・岡野・折井1975、関西学院大学考古学研究会1980・1987、直宮1991）、平井古墳群（武藤・橋本1977）、山本古墳群（武藤・橋本1977、関西学院大学考古学研究会1991）、山本奥古墳群（森本1992）、中筋山手東古墳群（橋本・小林1977）、中筋山手古墳群（関西学金大学考古学研究会1978、直宮・坂井1980）など200基を超える群集墳が築造される。長尾山丘陵の群集墳の中には、終末期から築造を開始する群集墳のタイプ（長尾山型）があり、注目されている（白石1982）。多数の横穴式石室が築かれるが、勝福寺古墳に続くような首長墓墳は認められない。

白鳥塚古墳は、このように数多く築かれた群集墳とは隔たった西方の尾根端に築かれた（梅原1930、直宮2013）。横穴式石室はその規模において当地域内では最大であり、突出した存在である。白鳥塚古墳の西隣りの尾根端には八角形墳として知られる中山荘園古墳（直宮・古川1985）がある。小型の横穴式石室を有する。また、両古墳に近接した位置にある北米谷からは、奈良時代の金銅製の蔵骨器が納められた石櫃が出土している（武藤・橋本1977）。

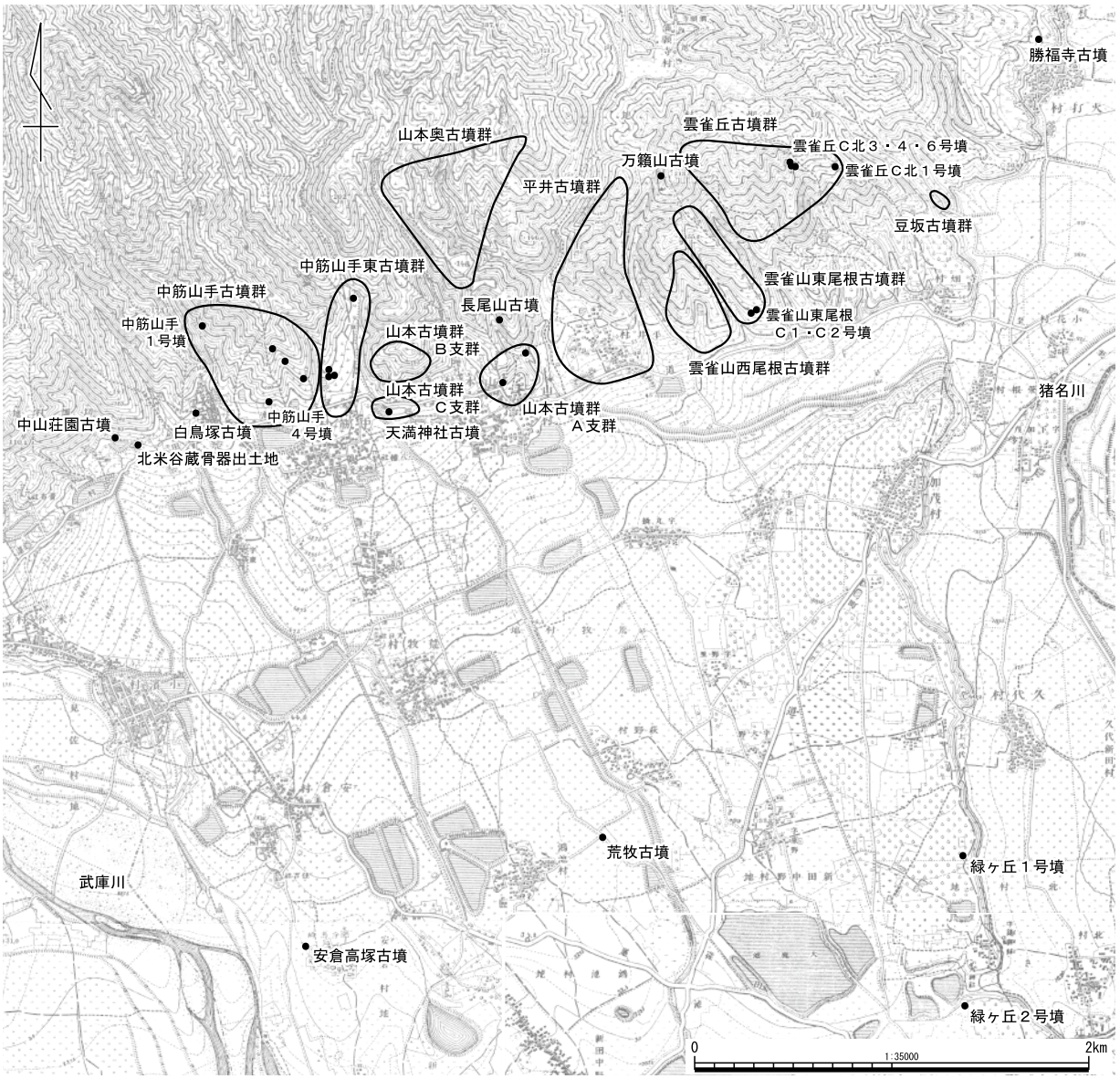


図４　周辺の古墳（明治20年測図）

この地域では前期から古墳が築かれるが、中期では希薄となり、後期後半において著しくその数を増している。

３　ゴーランドの調査

白鳥塚古墳の調査記録　白鳥塚古墳に関するゴーランドの記録は、横穴式石室を開口部から写した写真が１枚、調査内容を記したドキュメント３枚が大英博物館所蔵資料に確認される（図５・６）。ドキュメントの右上には、120、122、124の番号がそれぞれに振られており、120は白鳥塚古墳の立地や概要、122は横穴式石室について、124は家形石棺のことなどが記されている。

以下にドキュメントの英文を掲載するが、本文以外の文字は省略している。ゴーランドは略語をいくつか使用しており、例えばｖについては and を示すものだと考えられる。なお、併記された語は［　］で表し、文字が判読できないものや、あいまいな釈字については〈　〉をつけた。

【120】 Nakayama (Settsu) Ishi no Kara to. 6th feb 1887

~~There~~ ~~is~~ ~~a~~

In the village of Nakayama which is situated at the foot of the low range of hills which ~~form~~ stretch from Ikeda 〈to〉 the Jiu so gawa, within the ground of the temple of Kwanon (24th of the 33 noted temples of this goddess) there is well preserved dolmen containing a stone sarcophagus. The village is but a wide or so from the gorge of the river, v is distant 5′ 1/2″ ri from Osaka, 50 cho from Itami, 3 ri from Nishi no miya, 3 ri from Arima, 5 ri from Sanda. The hills form the N boundary of the plain. No other dolmen is said to occur near the village or in these hills.

The mound which formerly covered the dolmen chamber is quite obliterated, v must have been destroyed where the upper terrace of the temple was formed.

From the nature of the surrounding ground it seem never have ~~been surrounds~~ possessed a moat.

Its stones are all finds v unhewn, some megalithic especially is the roof of the chamber. Two in the back wall are 4′-2″ v 4′-3″ in height v entered the whole breadth of the dolmen. In the side walls usual measure about 5′-6″×~~5′-9″~~ 6′-9″, 5′-9″×4′-9″.

【122】 The W lintel stone of chamber is doubtfully hewn at one end. No mortar is seen in the joints, but small stones fill the interstices between the larger.

The side walls of the chamber taper about a foot each toward the top. Those of the gallery are but slightly inclined.

The breadth of the chamber varies from 7′-1″ at the back to 7′-7″ ~~at~~ where the gallery enters. The

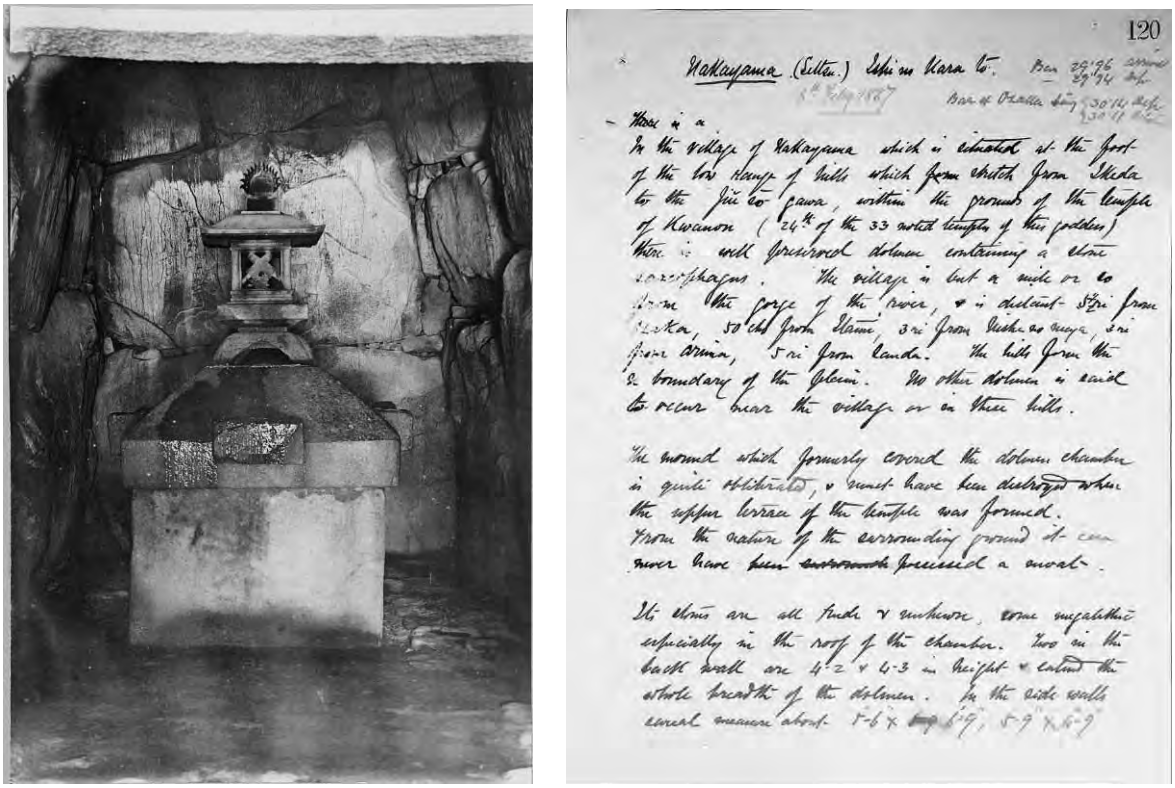


図 5　ゴーランドの白鳥塚古墳の記録　写真・120（The British Museum 所蔵）

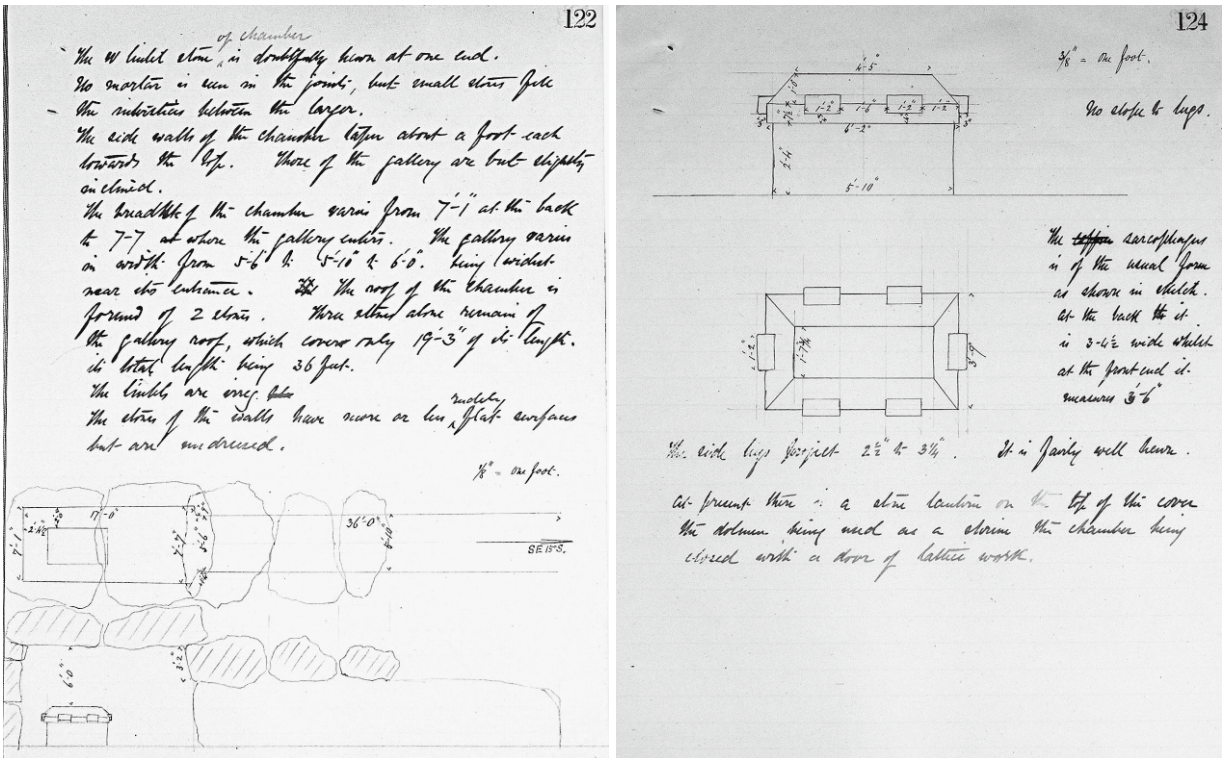


図 6　ゴーランドの白鳥塚古墳の記録　122・124（The British Museum 所蔵）

gallery varies in width from 5′–6″ to 5′–10″ to 6′–0″ being widest near its entrance. ~~Th~~ The roof of the chamber is formed of 2 stones. Three stones alone remain of the gallery roof, which cover only 19′–3″ of its length, its total length being 36 feet.

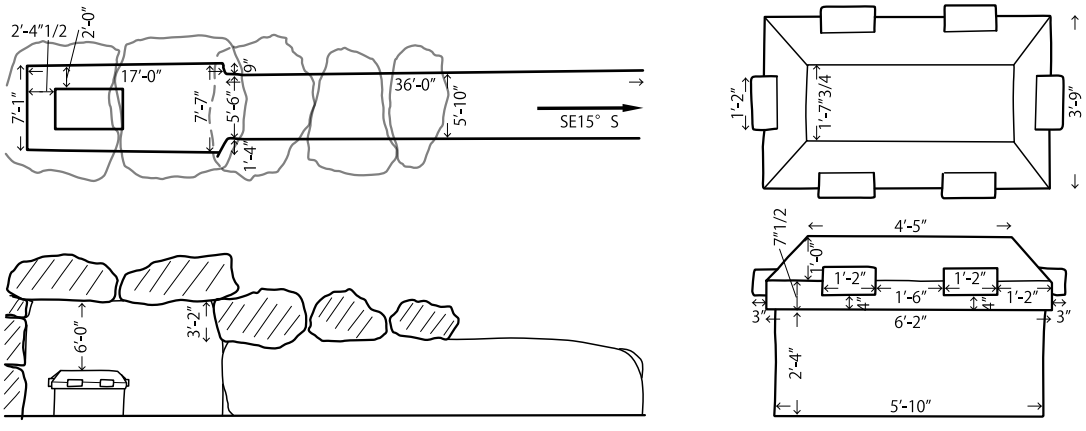
The lintels are irreg.

The stone of the walls have more or less rudely flat surfaces but are undressed.

【124】 The ~~coffin~~ sarcophagus is of the usual form as shown in sketch. At the back ~~the~~ it is 3′–4 1/2″ wide whilst at the front end it measures 3′–6″.

The side lugs project 2′ 1/2″ to 3′ 1/4″. It is fairly well hewn.

At present there is a stone lantern on the top of the cover the dolmen being used as a shrine the chamber being closed with a door of lattice work.



横穴式石室（約1/200）　　家形石棺（約1/50）

図 7　ゴーランドの白鳥塚古墳の計測図（122・124の原図を改変トレース）

白鳥塚古墳調査の経緯　ゴーランドがどのように白鳥塚古墳の存在を知り調査に及んだのか、その経緯については明らかではない。ただし、120に「Nakayama (Settsu) Ishi no Kara to」と表記されていることが手がかりとなる。

江戸時代に刊行された『摂津名所図会』の河邉郡六下の巻に紫雲山中山寺の項目があり、そこに「白鳥窟　俗に石唐櫃と云う。忍熊王廟なり。」と記載されている。横穴式石室の描写はないが、白鳥塚古墳が位置する辺りに「石のからと」という表記がある。ゴーランドがこの『摂津名所図会』を参考にした可能性は高い。

記録によると、ゴーランドは白鳥塚古墳の調査を明治20（1887）年２月６日（日）に行っている。来日してから約15年目であり、イギリスへ帰国するわずか１年前のことである。近くの古墳では、鉢塚古墳の調査を同年の３月３日（木）・３月31日（木）・４月１日（金）に実施している。また、白鳥塚古墳の調査から約１年後の明治21（1888）年２月16日（木）に再びこの地に訪れ、山本古墳群の調査を行っている。

調査の視点　ゴーランドは古墳の位置を明確に示している。横穴式石室については、壁体が上部に向かって内傾する構造であること、石室の幅は入口に向かって広くなること、石室は巨石を使用していること、切石加工はなされていないこと、石材間の隙間にモルタルは認められず、小石をつめていることなど細部に注目している。

横穴式石室と家形石棺の詳細な外形計測が行なわれており、ドキュメントには数値による図化がなされている。ゴーランドは開口方向や、石室のそれぞれの長さや幅のほか、羨道天井部の長さ、奥壁下部２石のそれぞれの高さ、側壁石材の規模、前壁高、石棺の蓋の頂部から天井石までの高さなども計測している。石棺では奥壁と左側壁との距離、蓋部と身部のそれぞれの長さや幅、高さに加え、縄掛突起や突起間の計測なども細かくとられている。ゴーランドの調査は当時のものとしては非常に精度の高いものであったと評価できる。

山本古墳群の調査記録　山本古墳群に関連する資料として、大英博物館にはドキュメントが４枚と、

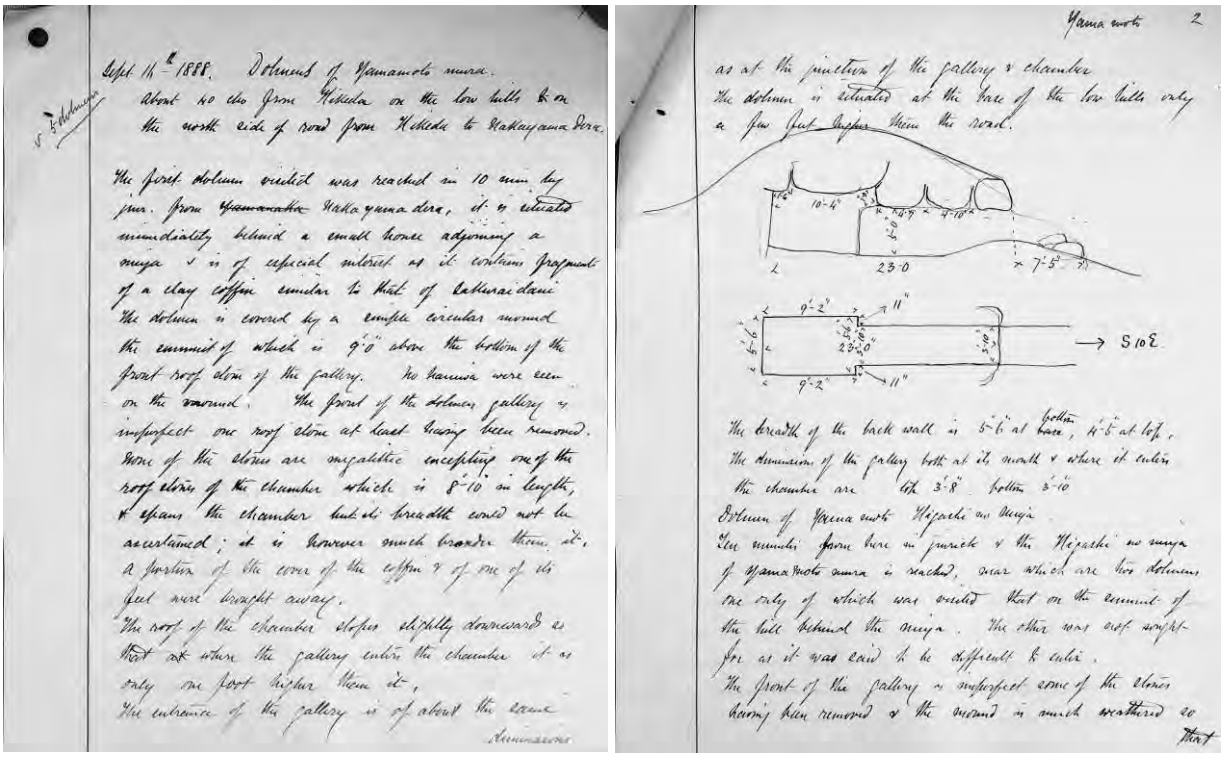


図８　ゴーランドの山本古墳群の記録　Yamamoto 1・2（The British Museum 所蔵）

山本古墳群出土の陶棺片２点が所蔵されている（図８・９、第Ⅲ章－２　前田論考　図30・31）。

ドキュメントには山本村の石室１基、山本東の宮の石室２基、同じ丘陵に位置するという石室２基の合計５基について触れている。そのうち、調査が可能な２基の両袖式の横穴式石室（山本村の石室１基と山本東の宮の石室１基）については詳細な記録が残されている。以下に、ドキュメントの英文を掲載する。

【Yamamoto 1・2】 Sept 16th-1888 Dolmens of Yamamoto mura.

About 40 cho from Hikeda on the low hills ~~to~~ on the north side of row from Hikeda to Nakayama dera.

The first dolmen visited was reached in 10 min by jinr. from ~~Yamanaka~~ Nakayama dera, it is situated immediately behind a small house adjoining a miya v is of especial interest as it contains fragments of a clay coffin similar to that of Sakurai dani. The dolmen is covered by a simple circular mound the summit of which is 9′–0″ above the bottom of the front roof stone of the gallery. No haniwa were seen on the mound. The front of the dolmen gallery is imperfect one roof stone at least having been removed. None of the stones are megalithic excepting one of the roof stones of the chamber which is 8′–10″ in length, v spans the chamber but its breadth could not be ascertained; it is however much broader than it. A portion of the cover of the coffin v of one of its feet were brought away.

The roof of the chamber slopes slightly downwards as that ~~at~~ where the gallery enters the chamber it is only one foot higher than it.

The entrance of the gallery is of about the same dimensions as at the junction of the gallery v chamber.

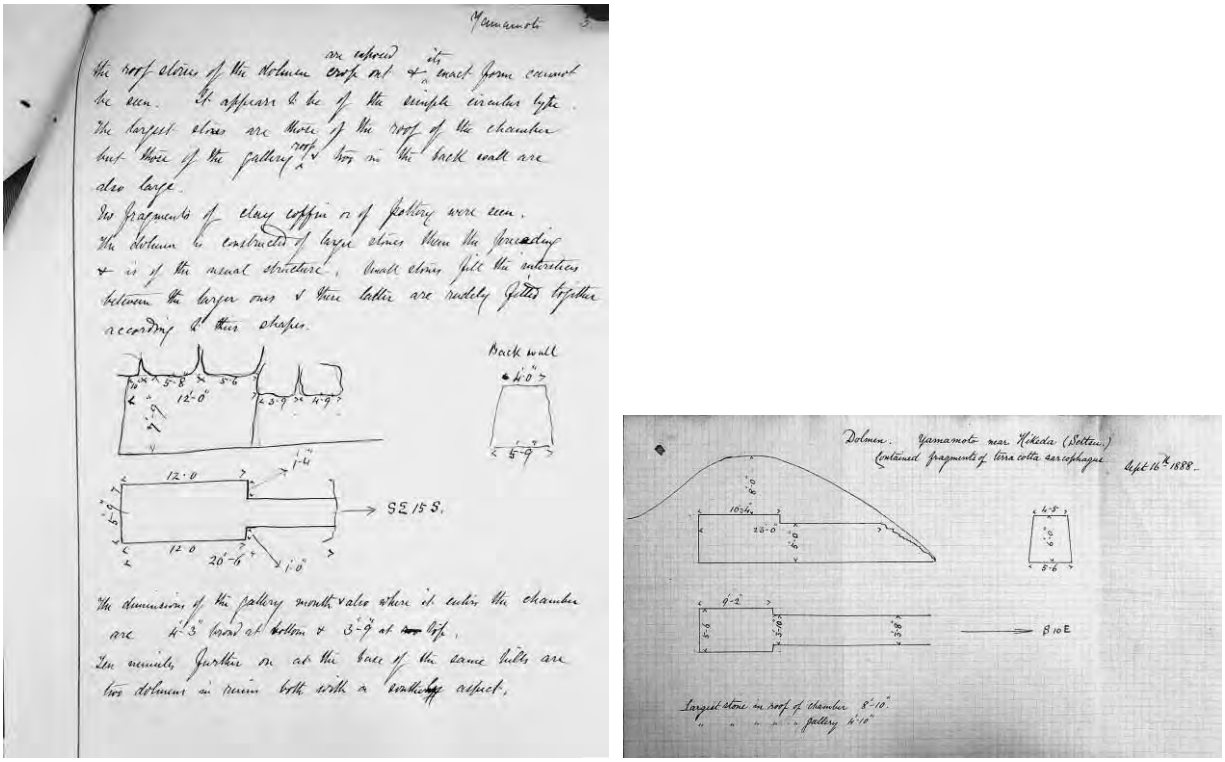


図９　ゴーランドの山本古墳群の記録　Yamamoto 3・無番号（The British Museum 所蔵）

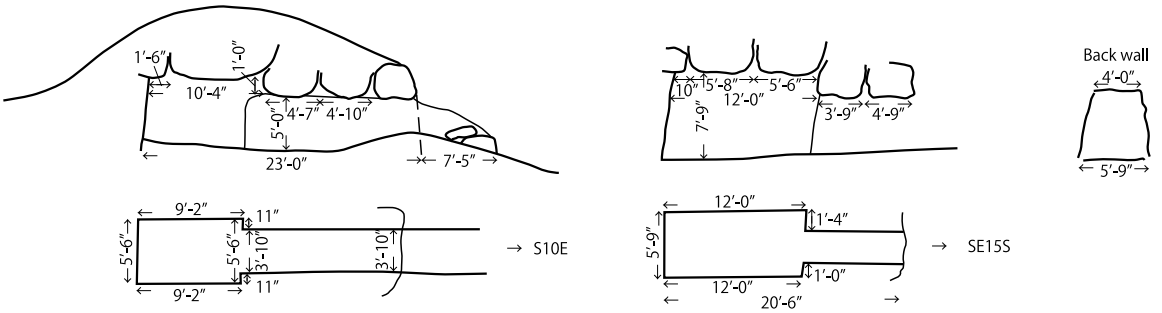


図10　ゴーランドの山本古墳群の計測図　Yamamoto 2・3（約 1 /200）（Yamamoto2・3 の原図を改変トレース）

【Yamamoto 2・3】 The dolmen is situated at the base of the low hills only a few feet higher than the road.

The breadth of the back wall is 5′–6″ at ~~base~~ bottom, 4′–5″ at top. The dimensions of the gallery both at its mouth v where it enters the chamber are top 3′–8″, bottom 3′–10″.

Dolmen of Yamamoto Higashi no miya.

Ten minutes from here in jinrike v the Higashi no miya of Yamamoto mura is reached, near which are two dolmens. One only of which was visited that on the mound of the hill behind the miya. The other was not sought for as it was said to be difficult to enter.

The front of the gallery is imperfect some of the stones having been removed v the mound is much weathered so that the roof stones of the dolmen crop out［are exposed］v its exact form cannot be seen.

【Yamamoto 3】It appears to be of the simple circular type. The largest stones are those of the roof of the chamber but those of the gallery roof v two in the back wall are also large.

No fragments of clay coffin or of pottery were seen.

The dolmen is constructed of large stones〈these〉the〈preceding〉v is of the usual structure. Small stones fill the interstices between the larger ones v these latter are rudely filled together according to their shapes.

The dimensions of the gallery mouth v also where it enters the chamber are 4′–3″ broad at bottom v 3′–9″ at top.

Ten minutes farther on at the base of the same hills are two dolmens in ruins both with a〈southerly〉aspect.

山本古墳群の位置　ドキュメントには古墳の位置などが記されており、調査した 2 基の石室については墳形、埴輪や出土遺物の有無、石室の詳細な規模や残存状況、巨石の使用位置などが記録されている。

山本村の石室は中山寺から10分ほどのところに位置しており、近くには宮がある。この古墳からはゴーランドが入手した桜井谷の陶棺に似た破片が出土している。円墳で、埴輪は認められない。この山本村の石室は、天満神社境内にある天満神社古墳の可能性が高い（第Ⅲ章－２　前田論考）。

山本東の宮の石室 2 基は山本村の石室からは

表１　ゴーランド石室一覧表（Gowland1897）

The Dolmens and Burial Mounds in Japan.

No.	Locality.	Chamber. L.	Chamber. Br.	Chamber. H.	Gallery. L.	Gallery. Br.	Gallery. H.	Total L.	Direction of Entrance.	Mound.	Notes.
		ft. in.	ft. in.	ft. in.	ft. in.	ft. in.	ft. in.	ft. in.			
94	Nakayama	17 0	7 4	10 0	36 0	5 8	6 2	53 0	S. 30° E.	Destroyed.	Chamber roof of two stones. Contains a hewn stone sarcophagus.
95	Yamamoto	9 2	5 6	6 0	21 3	3 10	5 0	30 5	S. 10° E.	Simple conical	Contains fragments of terra-cotta sarcophagus. Roof stone c. 9 feet by 8 feet.
96	Do.	12 0	5 9	7 9	Impf.	3 5	5 0	—	S. 30° E.	Do.	

近く、その内の 1 基は宮の背後の丘にあるとされている。「山本村の東の宮」とも記されており、山本村の石室が天満神社古墳であるとすれば、そこから東へ約600mのところに位置する松尾神社境内の山本古墳群 A 支群 1 号墳を指している可能性が考えられよう。ただし、この古墳についてはその詳細が明らかでない（宝塚市教育委員会2015）。

山本古墳群出土の陶棺　陶棺の破片 2 点は、山本村の石室から出土したものである。本報告の第Ⅲ章－ 2 で紹介してある。

引用・参考文献

石野博信　1971 「宝塚市長尾山古墳群」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第 1 集、兵庫県社会文化協会、pp.65-85

上田宏範（校注 / 監修）・稲本忠雄（訳）　1981 『日本古墳文化論－ゴーランド考古論集』、創元社

梅原末治　1930 「中山寺－其ノ境内ノ古代ノ遺跡遺物－」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第 7 輯、兵庫県、pp.5-12

岡田務・岡野慶隆・折井千枝子　1975 『宝塚市雲雀山古墳群　東尾根 A 支群・西尾根 B 支群の調査』宝塚市文化財調査報告第 6 集、宝塚市教育委員会

関西学院大学考古学研究会　1978 「長尾山の古墳群（Ⅰ）－中筋山手古墳群－」『関西学院考古』第 4 号、関西学院大学考古学研究会、pp. 1 -19

関西学院大学考古学研究会　1979 「長尾山の古墳群（Ⅱ）－雲雀丘古墳群－」『関西学院考古』第 5 号、関西学院大学考古学研究会、pp. 1 -16

関西学院大学考古学研究会　1980 「長尾山の古墳群（Ⅲ）－雲雀山西尾根古墳群－」『関西学院考古』第 6 号、関西学院大学考古学研究会、pp.33-44

関西学院大学考古学研究会　1987 「長尾山の古墳群（Ⅳ）－雲雀山西尾根古墳群－」『関西学院考古』第 8 号、関西学院大学考古学研究会、pp.8-26

関西学院大学考古学研究会　1991 「長尾山の古墳群（Ⅴ）－天満神社古墳－」『関西学院考古』第 9 号、関西学院大学考古学研究会、pp.13-22

参謀本部陸軍部測量局　1887 『京阪地方仮製貳萬分壹地形図　神戸兵庫近傍　24面組』、参謀本部陸軍部測量局（日本地図資料協会複製）

白石太一郎　1982 「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 1 集、国立歴史民俗博物館、pp.79-120

宝塚市教育委員会　2015 『宝塚市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表（改訂第 3 版）』宝塚市文化財調査報告第39集

寺前直人・福永伸哉（編）　2007 『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第 4 冊、大阪大学文学研究科考古学研究室

富山直人　2016 「白鳥塚古墳測量調査報告」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』ニュースレター 1 号、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.15-19

直宮憲一　1975 『摂津万籟山古墳』宝塚市文化財調査報告書第 7 集、宝塚市教育委員会

直宮憲一　1980 「宝塚市雲雀丘古墳群 C 北群 4 号墳出土の須恵器」『関西学院考古』第 6 号、関西学院大学考古学研究会、pp.45-46

直宮憲一　1991 『雲雀山西尾根古墳群発掘調査報告書－ B 支群の調査－』宝塚市文化財調査報告書第26集、宝塚市教育委員会

直宮憲一　2013 「中山寺白鳥塚古墳について」『中山寺の歴史と文化財』第一巻論文編、大本山中山寺、pp.173-191

直宮憲一・古川久雄　1985 『中山荘園古墳発掘調査報告書』宝塚市文化財調査報告第19集、宝塚市教育委員会

直宮憲一・坂井秀弥　1980 『長尾山の古墳群調査集報』宝塚市文化財調査報告第14集、宝塚市教育委員会

橋本　久　1975 「古墳は語る」『宝塚市史』第 1 巻、宝塚市、pp.201-313

橋本久・小林謙一　1977 『中筋山手東 2 号墳発掘調査報告』宝塚市文化財調査報告第11集、宝塚市教育委員会

ハリス , ヴィクター・後藤和雄（編）　2003 『ガウランド　日本考古学の父』、朝日新聞社

兵庫県教育委員会　2011 『兵庫県遺跡地図』第 2 ・ 3 分冊、兵庫県教育委員会

福永伸哉（編）　2010 『長尾山古墳発掘調査報告書』、大阪大学文学研究科考古学研究室

福永伸哉（編）　2011 『長尾山古墳第 6 次・第 7 次発掘調査概報』、大阪大学文学研究科考古学研究室

武藤誠・橋本久　1977 「考古編」『宝塚市史』第 4 巻資料編 I 、宝塚市、pp.67-206

森本　徹　1992 『山本奥古墳群』奈良大学考古学研究室調査報告第18集、山本奥古墳群調査団・奈良大学考古学研究室

Gowland, W., 1897. The Dolmens and Burial Mounds in Japan. *ARCHAEOLOGIA*, Vol.LV, pp.439-524

第Ⅱ章　白鳥塚古墳の調査と成果

1　今回の調査

白鳥塚古墳の石室や石棺は明治20（1887）年のゴーランドの調査後も、坪井良平氏（坪井1913）や梅原末治氏（梅原1930）、直宮憲一氏（直宮2013）によって図化がなされている（図11）。

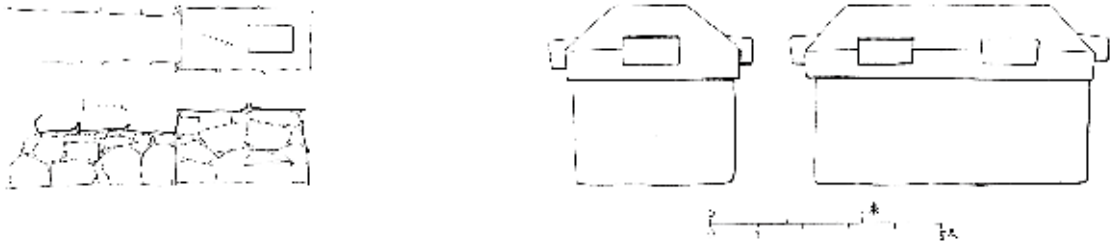
今回は多視点デジタル写真測量という新しい手法を用いての調査を試みた。通常では三次元レーザ計測器を用いて石室内部の計測を行うが、作業時間が数時間と限定され、かつレーザ計測器が狭小部では十分な計測が困難なことから、デジタルカメラで撮影した画像から SfM（Structure from Motion）を用いて三次元モデルを生成した（岡本2016）。

計測は、石室全体をおおよそ60～70％程度重なるように撮影を行い、座標と大きさを確定するための標定スケールの入った撮影も行った。また、実測図作成のための規模の計測調査などの作業は光波を用いた。

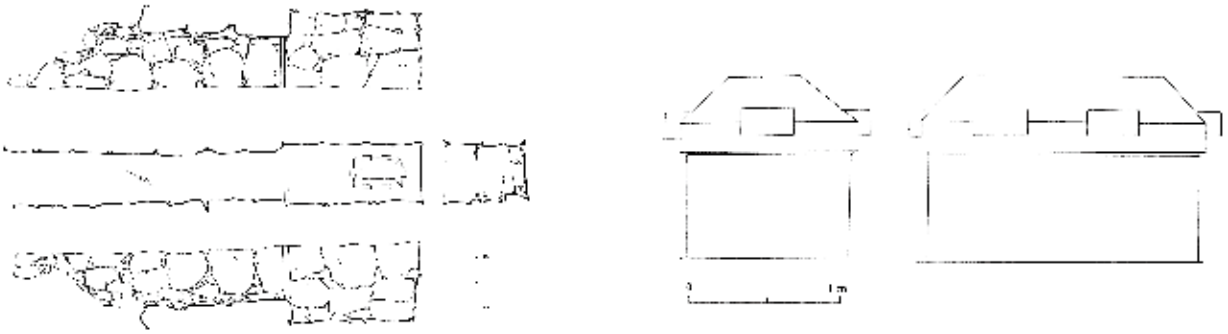
これらの成果をもとに放射輝度陰影図化したのが図12である。三次元データでは、石室の内部をあらゆる角度から見ることができ、容易に断面観察をすることが可能である。

図14と図21の横穴式石室と家形石棺の図は、計測結果をもとに線画をおこしたものである。後世に手が加えられた可能性の高い石積みや敷石などの表現は省いてある。

現地で行った作業としては、石室の計測に関する作業と写真撮影である。作業は、平成27（2015）年７月６日に多視点デジタル写真測量（岡本篤志）と、石室、石棺の規模の計測調査（富山直人）、同年７月31日に写真撮影（寿福滋）およびレベル移設（森下章司、西村秀子、林弘幸）、同年８月31日に実測図作成の為の補足作業（富山）を行った。



梅原末治氏実測図（梅原1930）



直宮憲一氏実測図（直宮2013）

図11　白鳥塚古墳の実測図

2　調査の成果

白鳥塚古墳の墳丘は後世の改変を大きく受けており、その形状については不明である。横穴式石室は、残存状態は良好であるが、その一部は後世に手が加えられた部分がみられる。また、横穴式石室の玄室には家形石棺が伴うが、出土遺物は知られていない。ここでは横穴式石室と家形石棺の概要を述べ、横穴式石室については石積みなど細部について観察を行う。

（1） 横穴式石室と家形石棺

横穴式石室　玄室と羨道からなる両袖式の横穴式石室である（図12・14）。石室の開口方向はS-33°-Eで、ほぼ南東方向である。玄室、羨道ともに天井部まで良好に残存している。

以下、横穴式石室の名称については図13に示す。壁面に関しては奥壁からみて右側を右側壁、左側を左側壁とする。

玄室の平面形は長方形をなし、羨道は開口部に向かってやや広がる。

石室の立面形態をみると、玄室の床面および天井部はほぼ水平である。羨道の床面は開口部側へ向けて若干下がるが、天井部はそれに反してやや上がる。奥壁と玄室の左右側壁の石積みは、基底石１段分は垂直であるが、上部は緩やかに内傾する。前壁は垂直をなし、羨道もほぼ垂直に積まれている。

石室の規模は、現存長が16.2m、玄室は長さ5.5m、幅は奥壁付近で2.3m、中央付近で2.4m、玄門付近で2.5m、高さは奥壁付近で2.9mである。羨道は長さ10.6m、幅は玄門付近で1.8m、開口部付近で２m、高さは玄門付近で２mである。袖部幅は右側壁側で35㎝、左側壁側で39㎝である。

石室の石材は花崗岩の大型石材を主に使用し、一部に結晶質凝灰岩を用いている（直宮2013）。石材の形は不揃いであるため、石材間に生じた隙間には小型石材を詰めているところが多く認められる。各壁面の石材は面を平らに見せるようにきれいに加工されている。

玄室の壁面は２～３段程度が積まれている。奥壁は３段あり、基底石と２段目は奥壁幅を満たす大型石材を用いている。３段目は小型の石材を使用している。左右側壁は１段を３石程度で構成している。基底石に大型石材を用い、天井部付近にはやや小型の石材を使う傾向が認められる。天井石は２石で構成される。袖部は左右ともに細長い石を立てており、前壁を兼ねる天井石との間に小型の石材を１段ほど積んでいる。前壁は１石で構成される。

羨道の石積みは、羨道天井石の前面辺りを境に石材の大きさや用い方などが奥壁側と開口部側とで異なっている。奥壁側は基本的には３～４石の大型の基底石を縦置きにして用いているのが特徴である。天井石との間には小型石材を１～２段ほど詰めている。開口部側は２段分ほどが残存しており、やや小型の石材を横置きにして用いている。

後世の改変　中山寺内に存するこの石室は、信仰の対象として大切に保存されてきた。現在では、玄門に石枠と鉄の扉が設置され、玄室部分を保護している。羨道の開口部側の壁面の中で、小型石材が積まれている部分は、のちに加えられたものと思われる。玄室と羨道の床面の境の段や敷石についても、築造当時のものではない可能性が高い。敷石は家形石棺の下には及んでいない。

家形石棺　竜山石製の刳抜式の家形石棺である（図21）。棺蓋には断面が長方形を呈する縄掛突起が、短辺に各１個、長辺に各２個の計６個認められる。石棺の規模は、身部長180㎝、身部幅106㎝、身部高66㎝、蓋部長190㎝、蓋部幅116㎝、蓋部高49㎝、蓋部平坦面長135㎝、蓋部平坦面幅50㎝である。縄掛突起は長辺37㎝前後、短辺16㎝前後である。

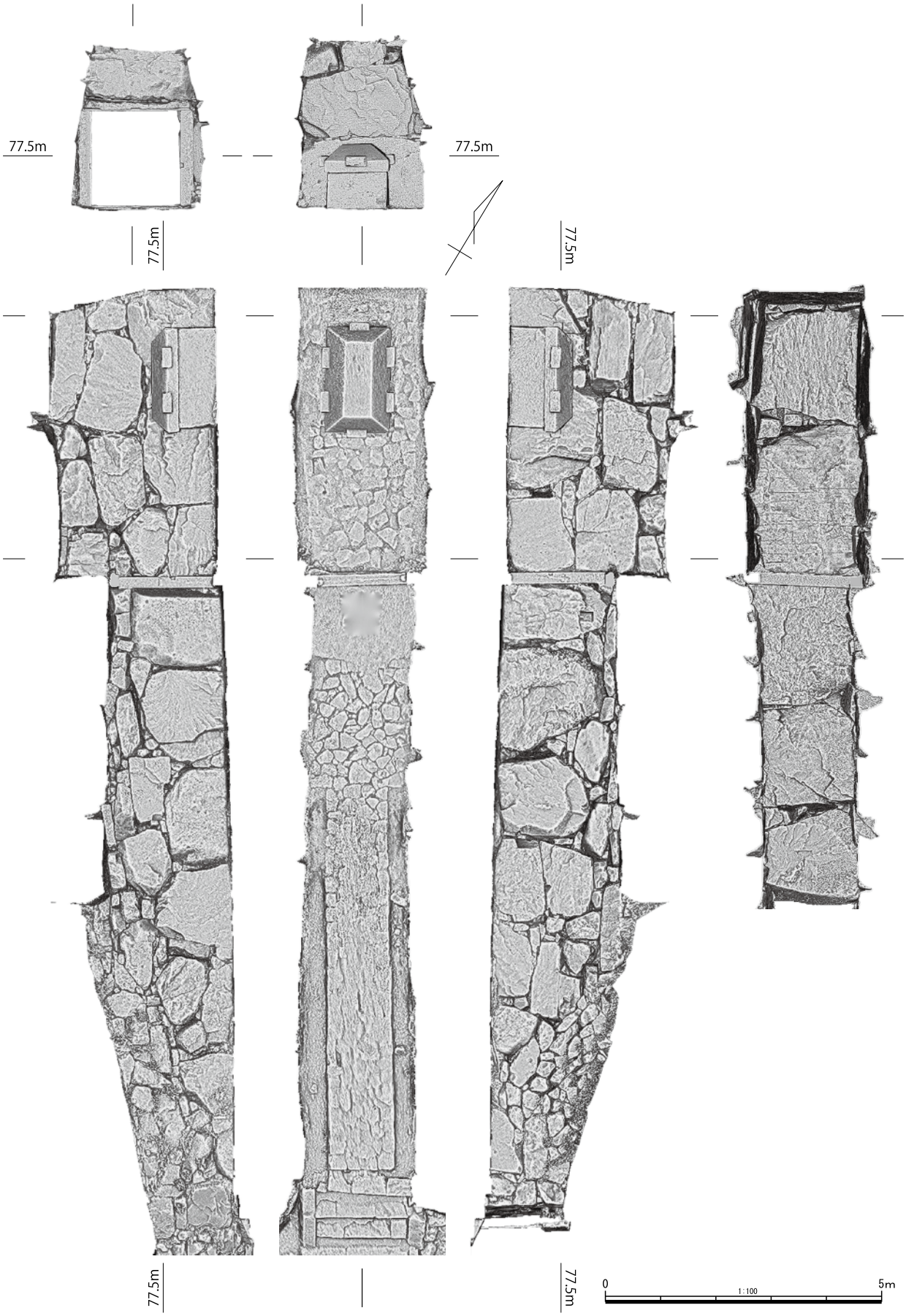


図12　SfM による白鳥塚古墳の放射輝度陰影図

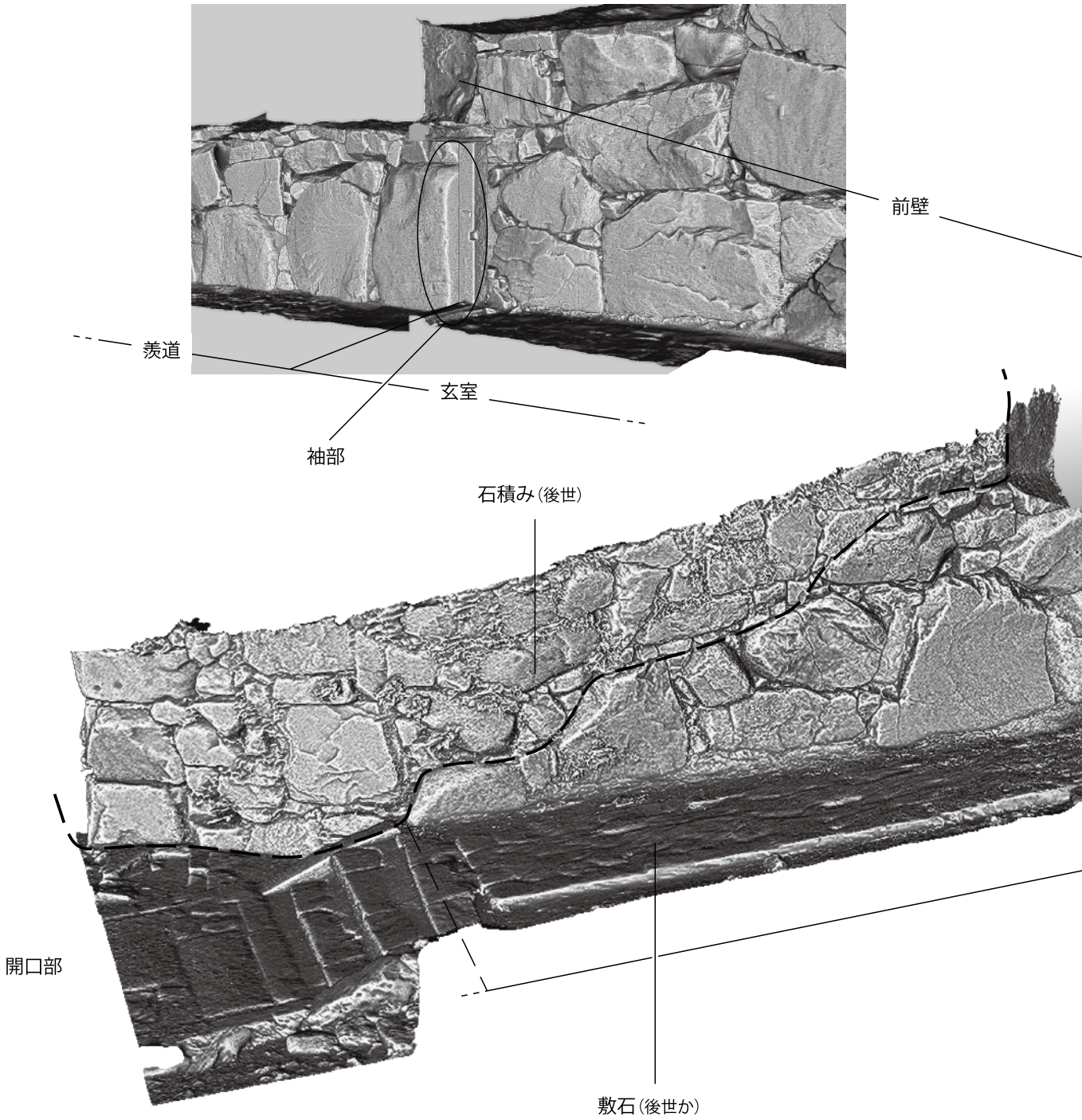
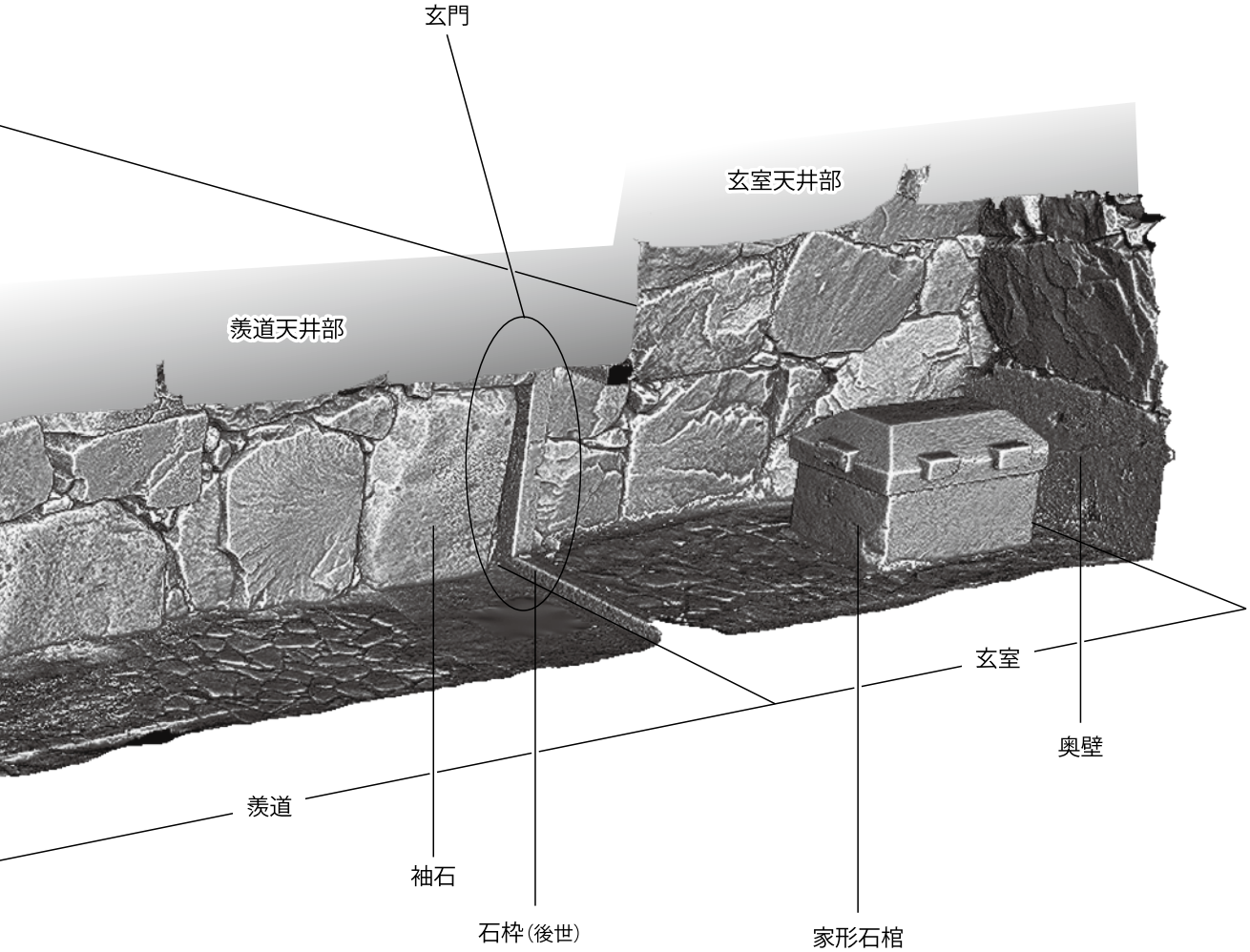
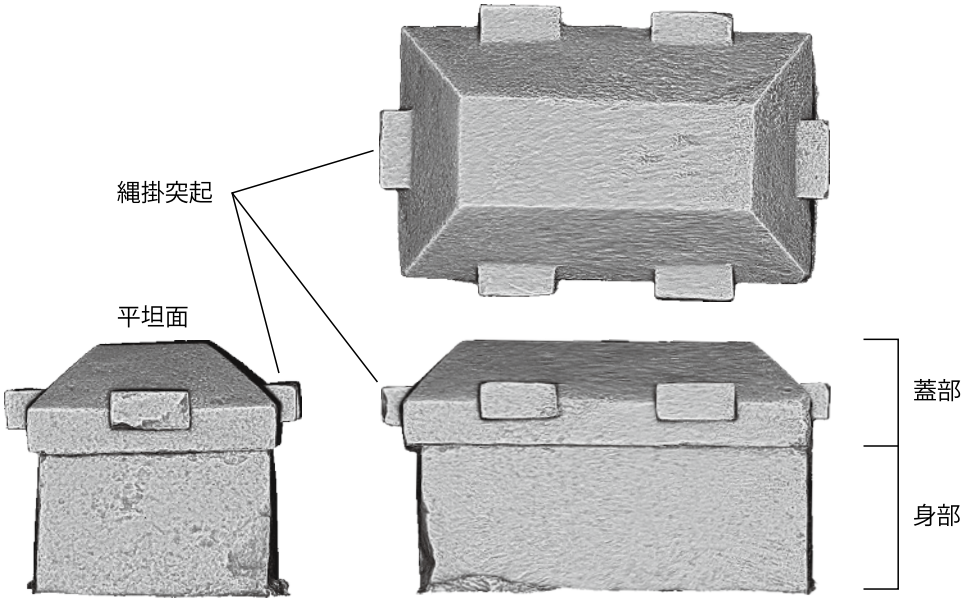


図13　横穴式石室と





家形石棺の各部名称

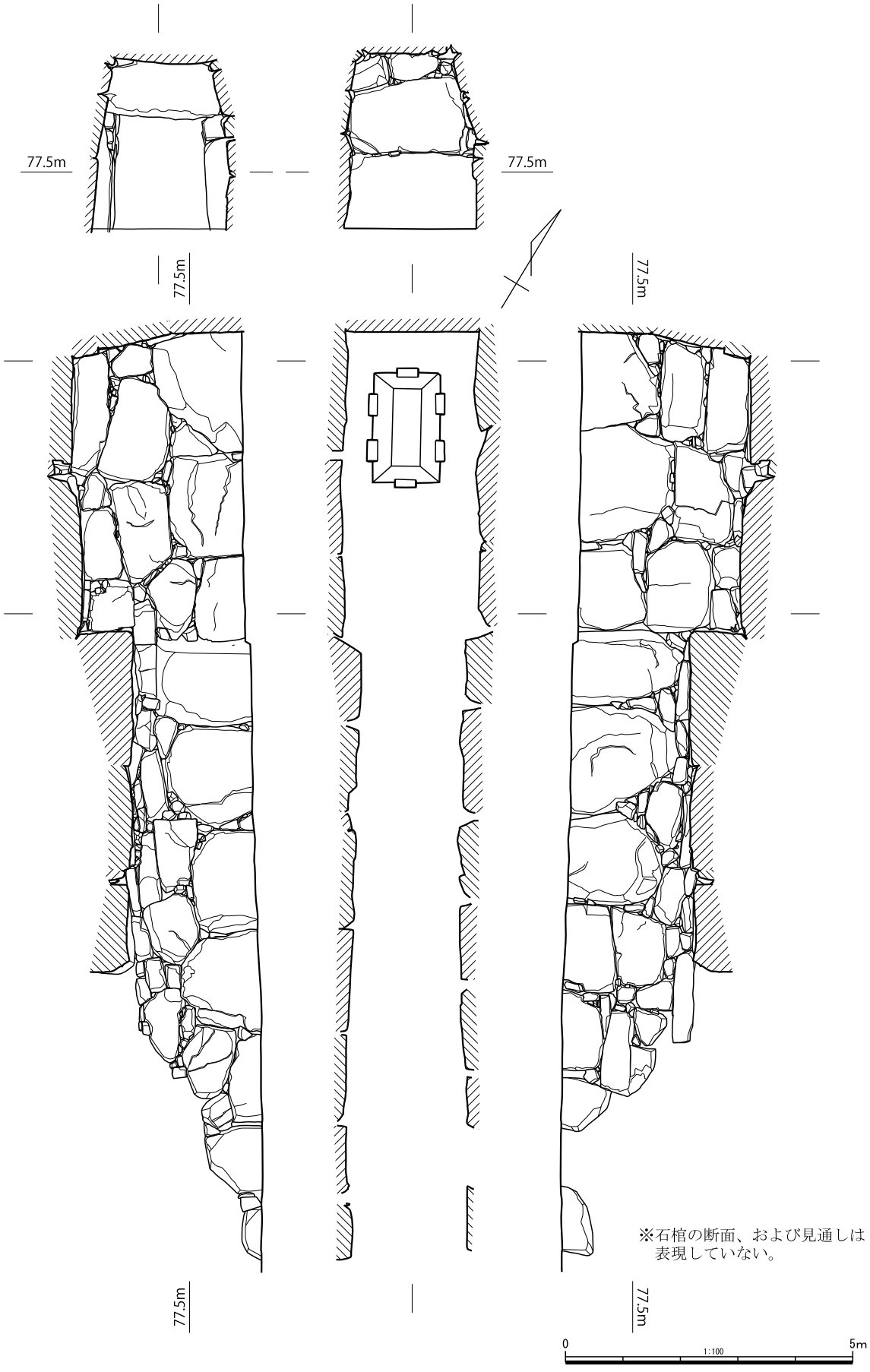
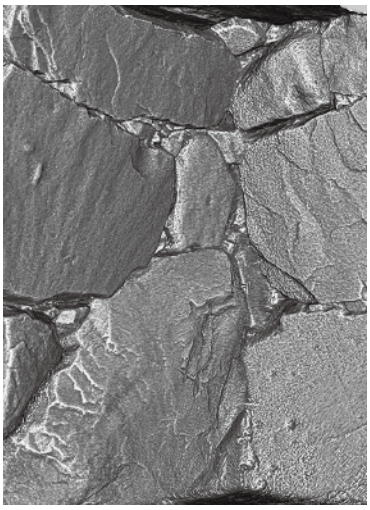
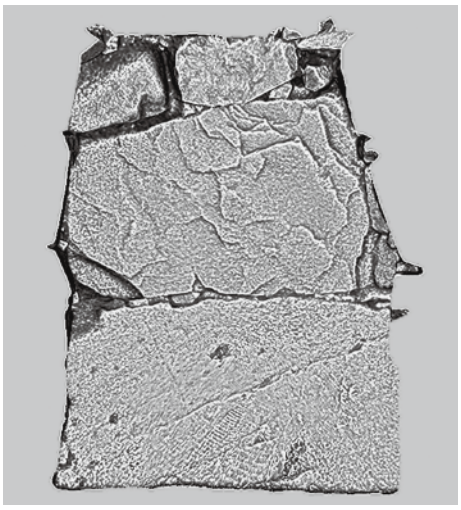


図14　横穴式石室と家形石棺


奥壁と玄室右側壁の隅部


奥壁

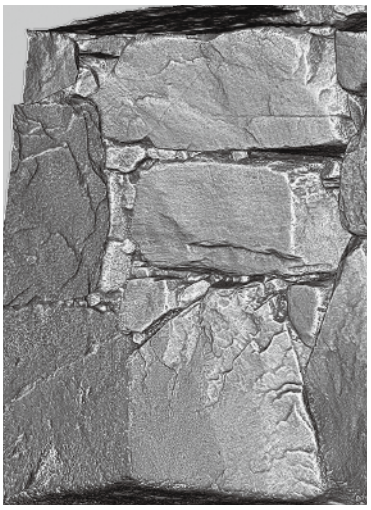

奥壁と玄室左側壁の隅部

図15　奥壁と玄室側壁

（2） 横穴式石室の石積みの特徴

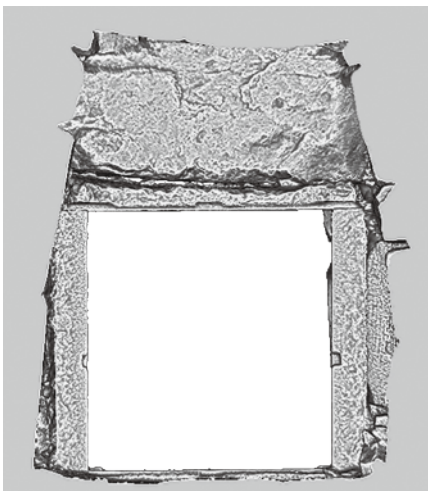
各壁面の石積みの細部を見ていく。その際に、垂直方向に関しては基底石から上方向へ何段目かで示し、水平方向に関しては奥壁から開口部へ向かって何石目かで表す。

奥　壁（図15） 大型石材と小型石材を合わせて３段で構成する。下部に玄室幅を満たす大型石材を各段１石ずつ２段に積み、３段目は小型の石材を１段に２石置く。基底石の上面は比較的平らである。２段目の大型石材の上面は右側壁側に向かって傾斜する。３段目は右側壁側から積んでおり、左側壁側に空いた隙間にはさらに小型の石材を詰める。基底石は垂直に立ち上がるが、２段目以上は玄室内へ緩やかに傾斜している。

玄室右側壁（図17） 奥壁側は大型石材を３段ほど積んで構成し、羨道側はやや小型の石材を４段ほど積んでいる。基底石は １ 段に３石配し、上部は小型石材を含め１段に４石ほどで構成する。横目地も縦目地もあまり揃わない。奥壁と同様に基底石は垂直に立ち上がり、２段目から天井石までは玄室内へ緩やかに内傾している。

奥壁と側壁の関係をみると、右側壁の壁面に奥壁の側面が接する（図15）。奥壁基底石と右側壁基底石の上面は揃わないが、２段目の石材の上面の高さはほぼ揃う。

玄門左側


奥壁からみた玄門

玄門右側

図16　玄門と玄室側壁

図17　右側壁

玄室左側壁（図18）　大型石材と小型石材を合わせて３段ほどで構成され、１段には３石ほどを配している。横目地は通らないが、縦目地はおおむね揃う。奥壁側は比較的規模の揃った大型石材を積んでいる。奥壁から２列目と３列目は基底石と２段目に大型石材を用い、３段目には小型石材を積んでいる。基底石は垂直に立ち上がり、２段目以上は玄室内へ右側壁よりも内傾させている。

奥壁と側壁の関係をみると、奥壁の壁面に左側壁の側面が接している（図15）。奥壁と左側壁の各石材の上面の高さはあまり揃わない。隅部に小型石材の充填が目立つ。

玄室天井石（図12・17・18）　大型石材２石がほぼ水平に架けられ、左側壁側では２石の間に小型石材を挟んでいる。奥壁側の天井石は１列目を覆い、羨道側の１石はおおむね２列分にまたがる。

玄　門（図16）　現在では玄門に保護のために後世に設置された石枠と鉄格子があるため、袖部の観察は難しい状況である。袖部基底石は、左右のいずれも細長い石を立てて用いた立石であり、前壁を兼ねる羨道天井石までは小型石材を１段ほど詰めている。袖部の突出度はいずれも強くない。前壁は１石で垂直に架けられている。

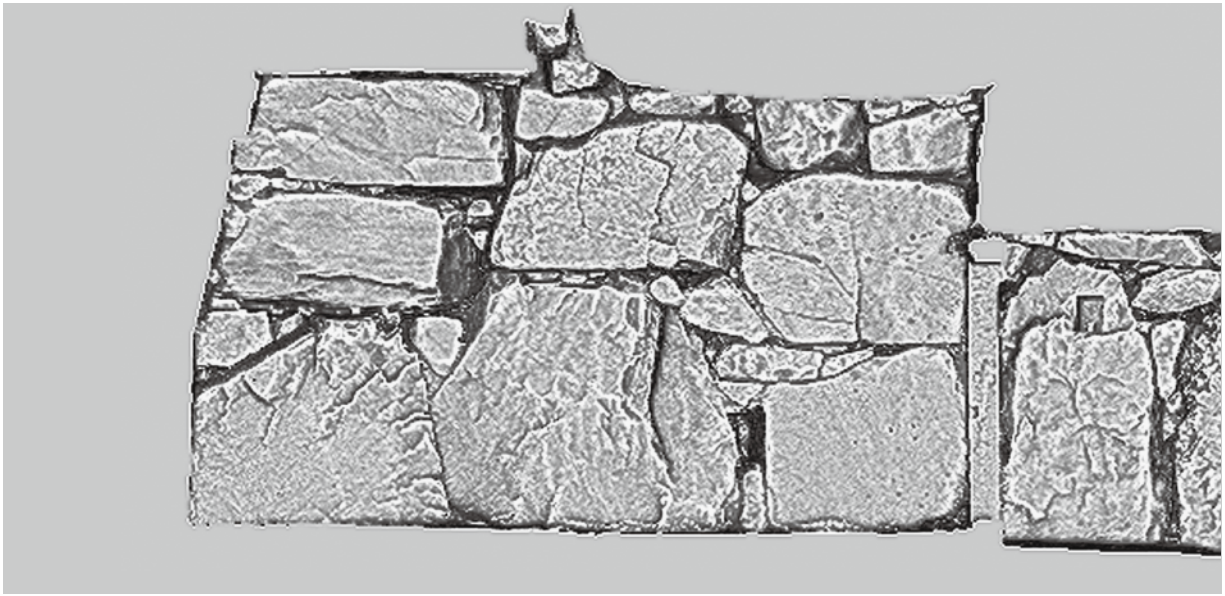
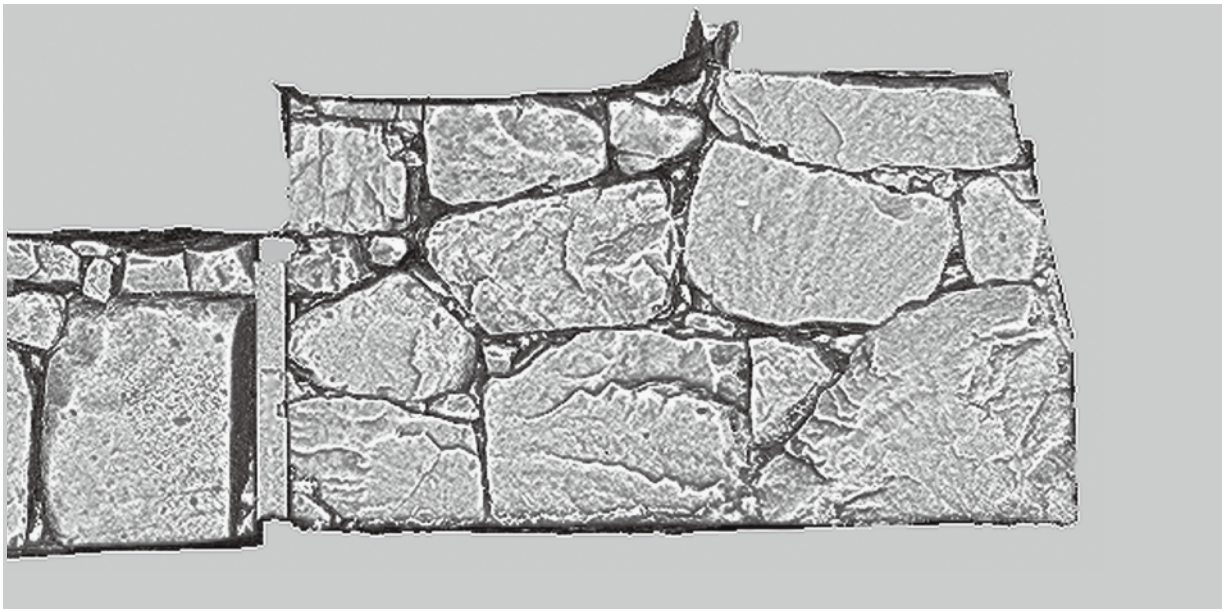
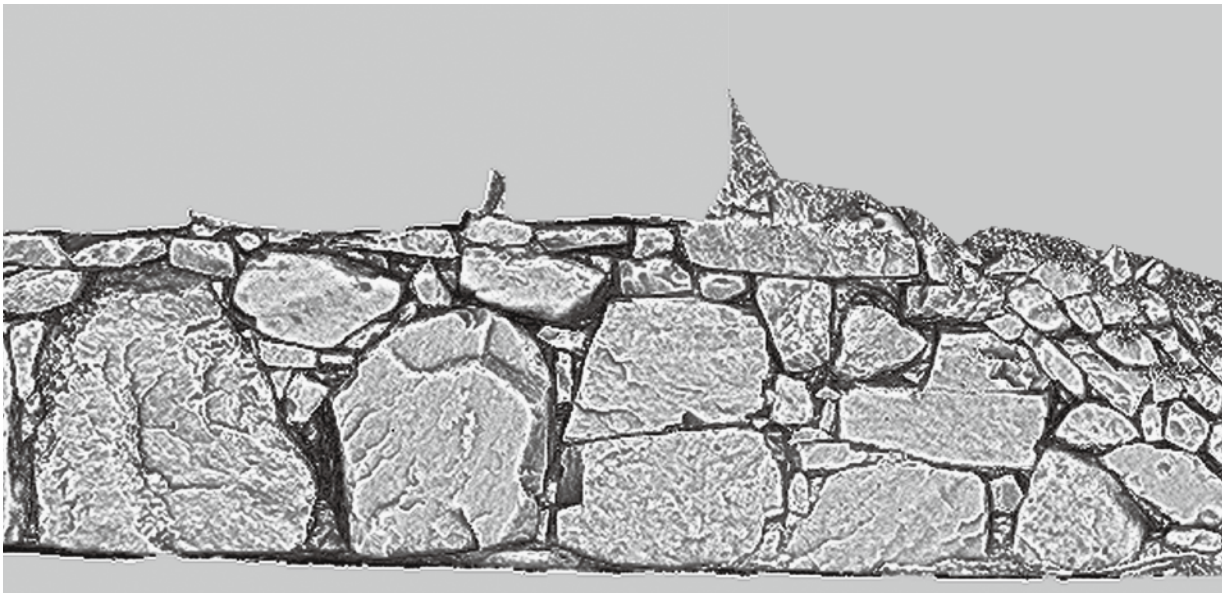


図18　左側壁



羨道右側壁（図17） 羨道天井石の前面辺りから奥壁側の基底石は袖石を含めて４石分が大型石材を使用している。袖石と、その隣接する２石目の基底石は石材を立てて用い、天井石までは小型石材を１～２段積んでいる。３石目は横置きに、４石目は縦置きにしている。また、３石目と４石目は奥壁側の基底石よりもやや小型であるため、天井石までは小型石材を２～３段ほど積んで奥壁側との高さを調整している。目地はあまり通らない。羨道天井石の前面辺りから開口部側は、やや小型の石材を横置きにして用いている。

羨道左側壁（図18） 基底石は袖石を含めた３石目までが、ほぼ同じ長さの大型石材を立てて用いている。４石目は奥壁側の半分ほどの大きさの石材を２段積んでおり、その２段目の上面が奥壁側の基底石の上面の高さと揃っている。石材間には小型石材を多数詰めているため目地はあまり通らないが、基底石の上面の高さのレベルでおおむね揃うように配されている。天井石までは小型石材を１～２段ほど積んでいる。羨道天井石の前面辺りから開口部側は、奥壁側よりも小型の石材を横置きにして用いている。



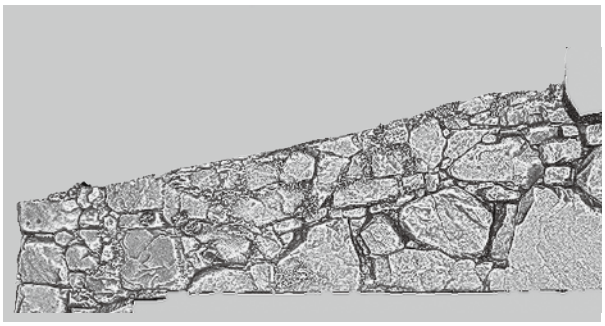


図19　右側壁（羨道開口部側）

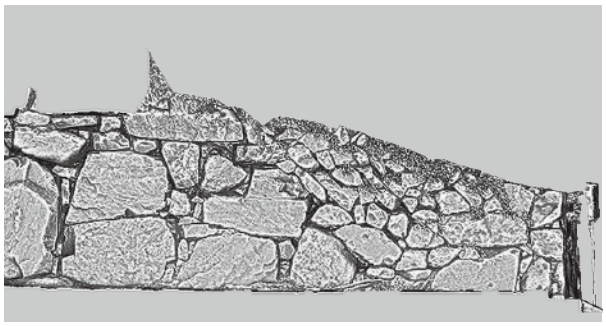


図20　左側壁（羨道開口部側）

羨道天井石（図12・17・18）　３石が残存しており、ほぼ水平に架けられている。前壁を兼ねる羨道天井石には最も大型の石材を用いており、開口部に向かうにしたがい石材は小型となる。左側壁側は２石目と３石目の間に小型石材を挟んでいる。

（3）　家形石棺

刳抜式の家形石棺は、玄室のやや奥壁寄りの位置に、石室の主軸上に軸を揃えて置かれている（図14・21）。身部は原位置を保った状態である可能性が高いが、蓋部は身部から僅かにずれている。

石材は播磨の竜山産の凝灰岩を用いている（間壁ほか1976）。

棺蓋には断面が長方形を呈した縄掛突起が、短辺に各１個、長辺に各２個の計６個が認められる。

石棺の規模は、身部長180㎝、身部幅106㎝、身部高66㎝、蓋部長190㎝、蓋部幅116㎝、蓋部高49㎝、蓋部平坦面長135㎝、蓋部平坦面幅50㎝である。縄掛突起は長辺37㎝前後、短辺16㎝前後である。

棺蓋頂部の平坦面はやや広く、平坦面指数（平坦面幅 ÷ 蓋の全体幅 ×100）は43である。縄掛突起はいずれも垂直面に近い位置にあり、角の面取りはなされていない。石棺の表面には一部に工具痕跡が観察できる。

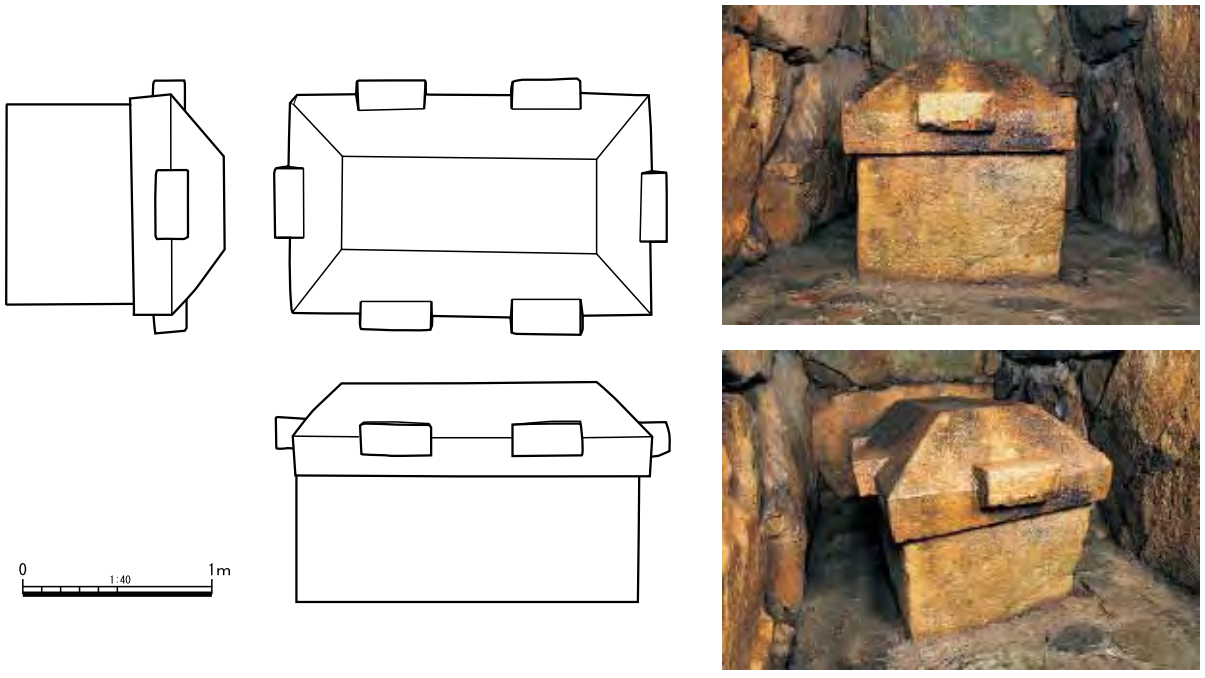


図21　家形石棺

図22　羨道と玄室

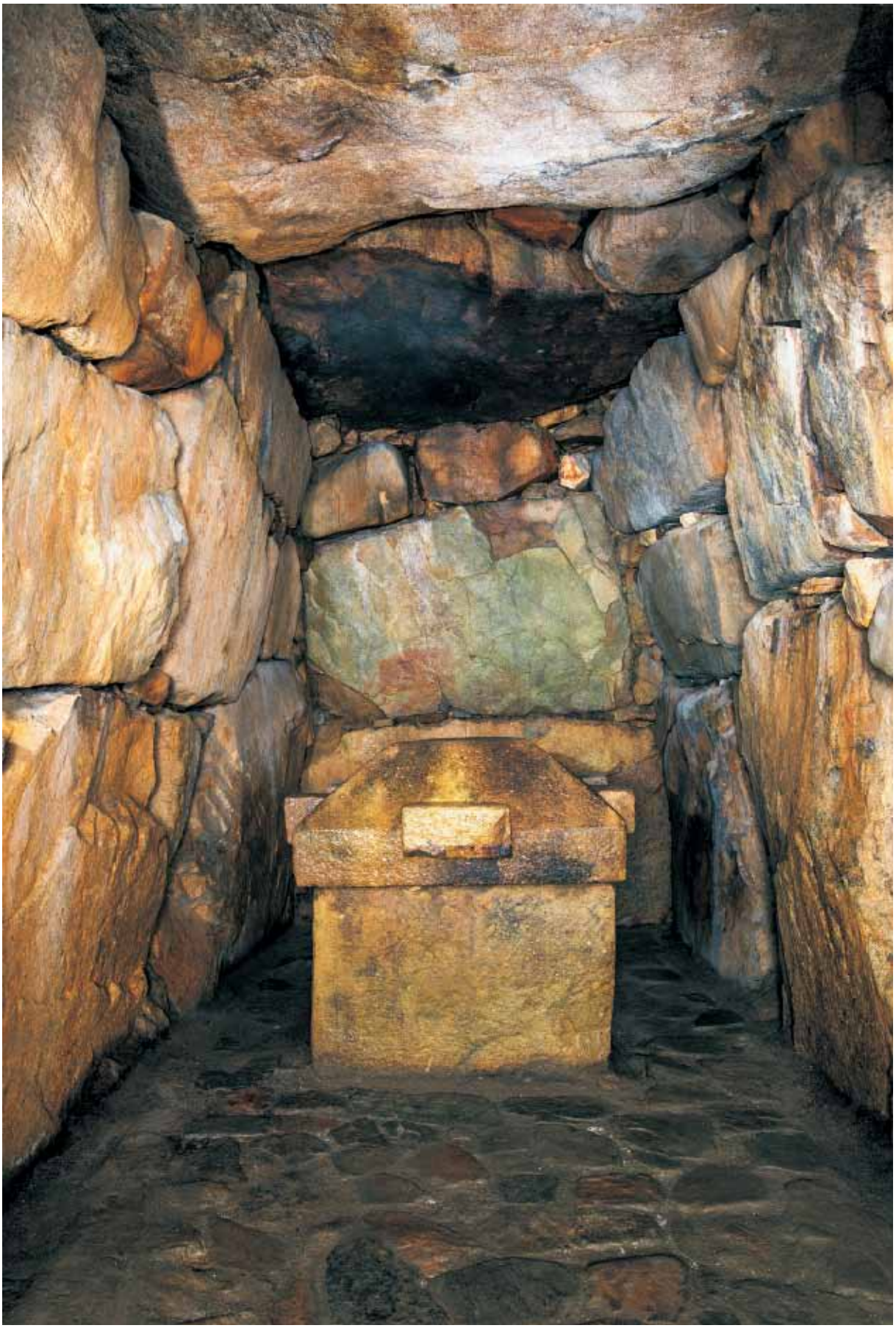


図23　玄室と家形石棺

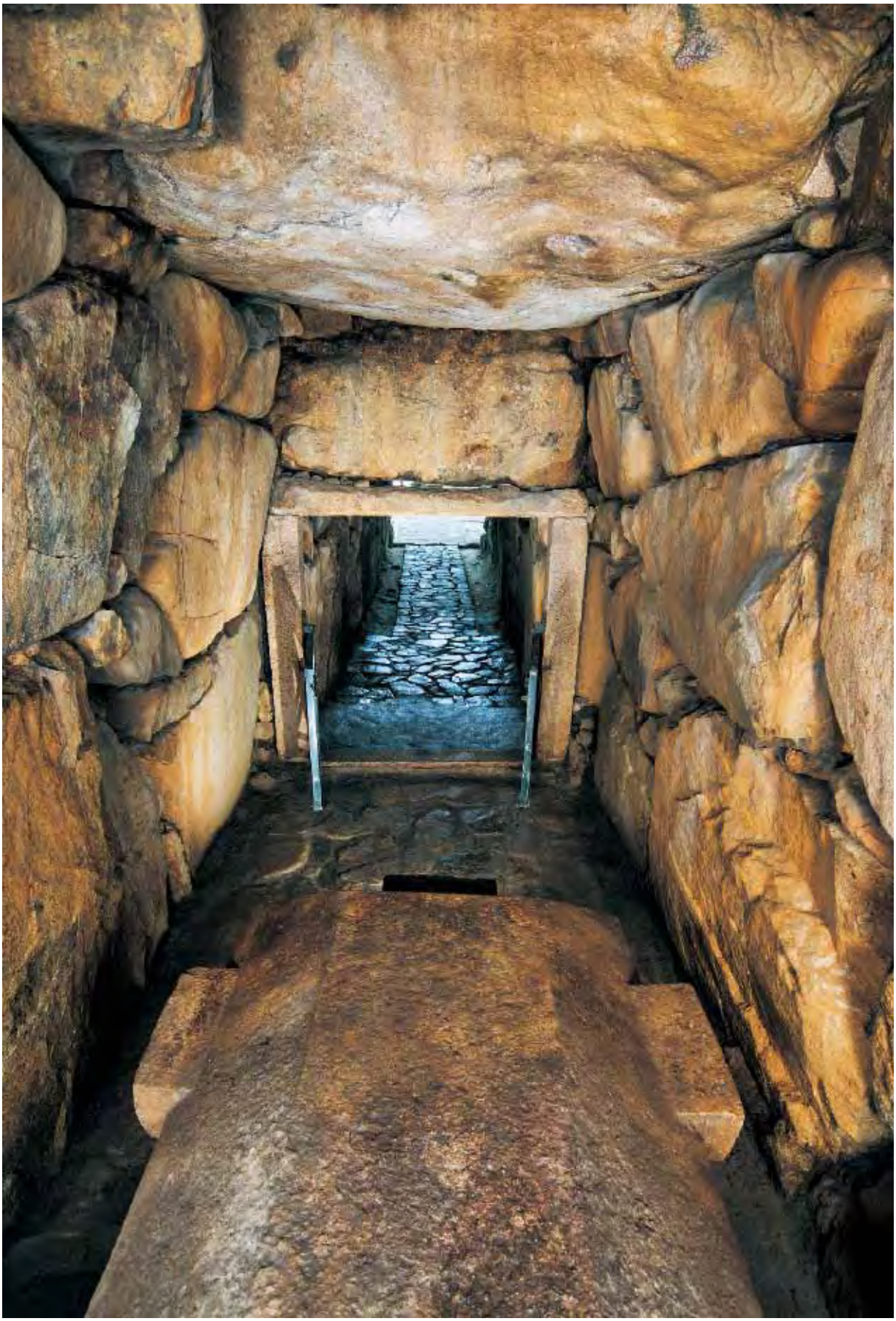


図24　玄門と羨道

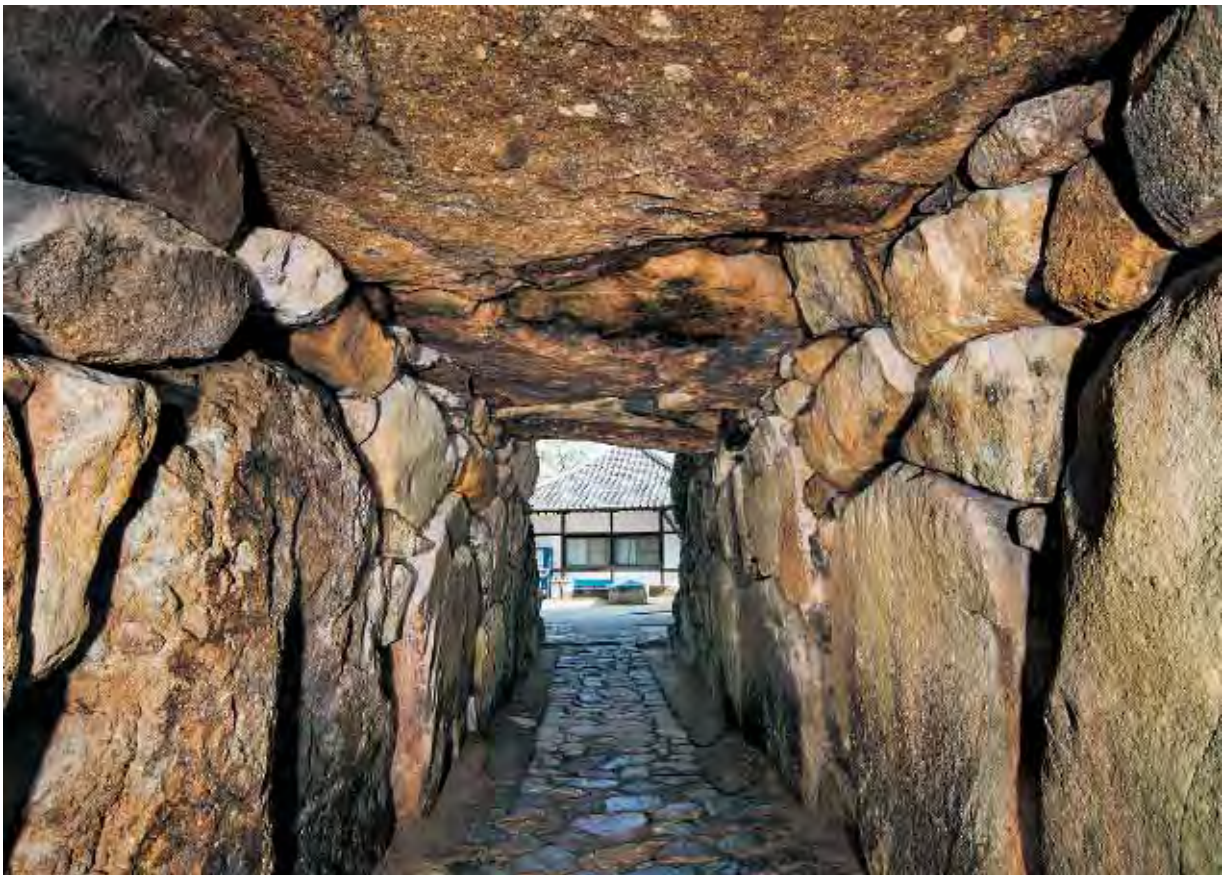


図25　羨　道

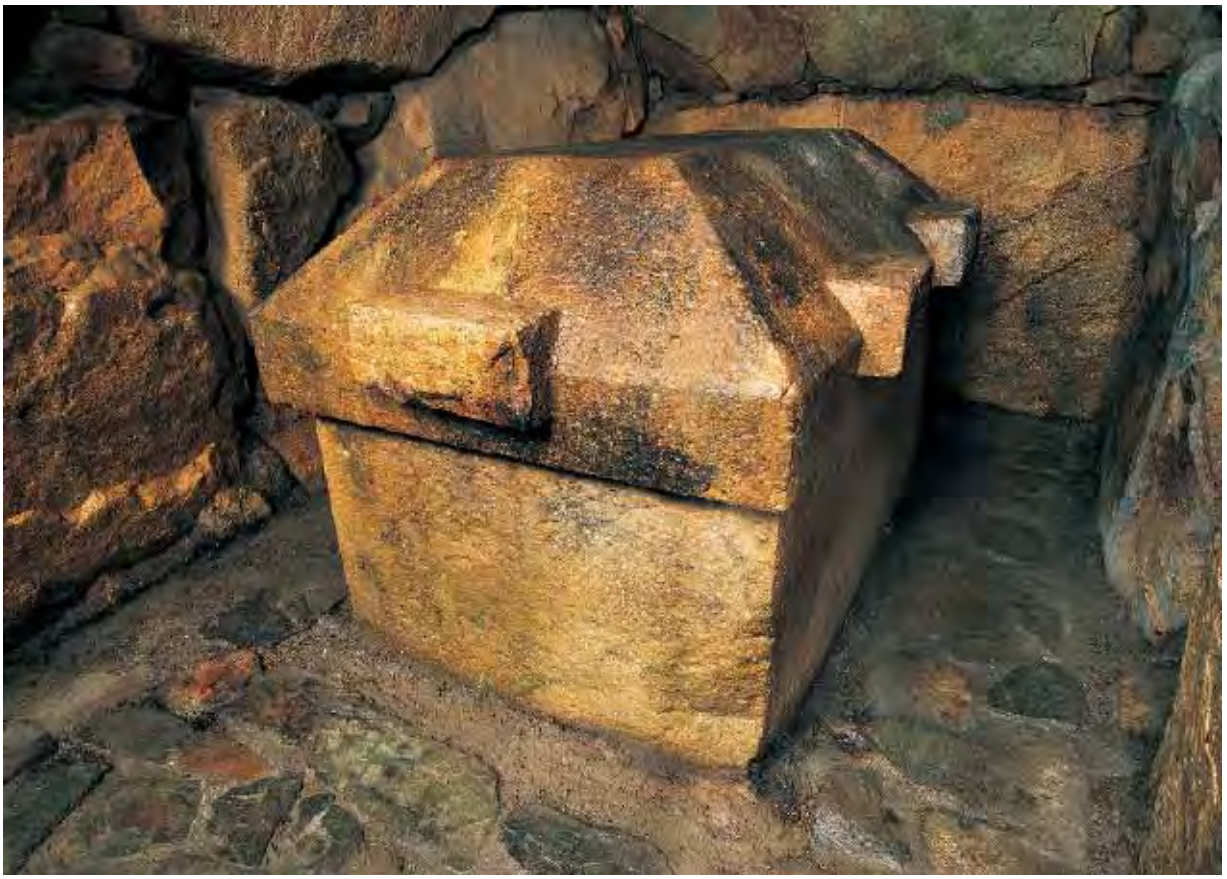


図26　家形石棺

（4） まとめ

横穴式石室　玄室と羨道からなる両袖式の大型横穴式石室である。

・石室の開口方向は S-33°-E で、ほぼ南東方向へ開口する。
・現存長16.2m、玄室長5.5m、玄室幅（中央付近）2.4m、玄室高（奥壁付近）2.9m。
・羨道長10.6m、羨道幅（玄門付近）1.8m、羨道高（玄門付近）2m、袖部（右）35㎝、袖部（左）39㎝。
・両袖部の袖石基底石は立石で、前壁を兼ねる羨道天井石との間に小型石材を挟む。
・奥壁は 3 段ある。基底石と 2 段目は奥壁幅を満たす大型石材を用い、 3 段目は小型石材を 1 段 2 石配して構成される。玄室側壁は 3 段 3 石程度を配している。前壁は 1 石で垂直をなす。
・羨道は羨道天井石の前面辺りを境に奥壁側と開口部側とで様相が異なる。奥壁側では基底石が大型で、立てて用いる傾向がある。開口部側ではやや小型の石材を横置きにして用いる。

家形石棺　竜山石製の刳抜式の家形石棺である。

・玄室の中央よりも奥壁寄りの位置に、石室の主軸上に置かれる。
・棺蓋には断面が長方形を呈した縄掛突起が、短辺に各 1 個、長辺に各 2 個の計 6 個ある。
・身部長180㎝、身部幅106㎝、身部高66㎝。
・蓋部長190㎝、蓋部幅116㎝、蓋部高49㎝、蓋部平坦面長135㎝、蓋部平坦面幅50㎝、縄掛突起長辺37㎝前後、短辺16㎝前後。平坦面指数は43。
・縄掛突起は垂直面に近い位置にある。

ゴーランドの計測値との比較（表 2 ）　ゴーランドの計測値と今回の調査の計測値を比較すると、横穴式石室では羨道長（左側壁付近）では約37㎝の差があるが、その他では20㎝未満の違いである。家形石棺では約 5 ㎝未満の差である。

表 2　ゴーランドの白鳥塚古墳の横穴式石室・家形石棺の計測値との比較

横穴式石室	玄室長	玄室幅		袖部幅		羨道長	羨道幅		
	左側壁付近	奥壁付近	玄門付近	右袖	左袖	左側壁付近	玄門付近	中央付近	羨門付近
ｺﾞｰﾗﾝﾄﾞ計測	17′-0″	7′-1″	7′-7″	1′-4″	0′-9″	36′-0″	5′-6″	5′-10″	6′-0″
換算値	5.18	2.16	2.31	0.406	0.229	10.97	1.6	1.78	1.83
今回調査	5.3	2.3	2.5	0.35	0.39	10.6	1.8	1.9	2

家形石棺	身部			蓋部			平坦面		縄掛突起	
	長さ	幅	高さ	長さ	幅	高さ	長さ	幅	長辺	突出（下部）
ｺﾞｰﾗﾝﾄﾞ計測	5′-10″	3′-6″	2′-4″	6′-2″	3′-9″	1′-0″, 7″1/2	4′-5″	1′-7″ 3/4	1′-2″	3″
換算値	1.778	1.067	0.711	1.88	1.143	0.496	1.356	0.502	0.356	0.076
今回調査	1.8	1.06	0.66	1.9	1.16	0.49	1.35	0.5	0.37	0.09

ゴーランドの計測の単位は feet・inch、換算値と今回調査の単位は m

引用・参考文献

梅原末治　1930 「中山寺－其ノ境内ノ古代ノ遺跡遺物－」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第 7 輯、兵庫県、pp.5-12
岡本篤志　2016 「SfM を用いた多視点デジタル写真測量による白鳥塚古墳三次元計測」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』ニュースレター 1 号、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.20-23
坪井良平　1913 「摂津国中山寺石棺（石槨内）」『酔古雑録』第 1 版（1955年復刻版）、pp.132-133
富山直人　2016 「白鳥塚古墳測量調査報告」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』ニュースレター 1 号、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.15-19
直宮憲一　2013 「中山寺白鳥塚古墳について」『中山寺の歴史と文化財』第一巻論文編、大本山中山寺、pp.173-191
間壁忠彦・間壁葭子・山本雅靖　1976 「石材からみた畿内と近江の家形石棺」『倉敷考古館研究集報』第12号、倉敷考古館、pp.1-57

第Ⅲ章　白鳥塚古墳と山本古墳群の分析

1　白鳥塚古墳の位置付け

奥田　智子

白鳥塚古墳は大型の横穴式石室に竜山石製の刳抜式家形石棺を有しており、西摂地域の６世紀後半から７世紀を知るうえで重要な古墳である。地域内の横穴式石室の中ではその規模において突出した存在であり、当古墳の評価に関しては主に畿内の横穴式石室との関係から論及されてきた（岡野1989、直宮2013、富山2016）。ここでは、具体的にはどのような特徴から畿内、とくに大和との関係がうかがえるのか、また、長尾山丘陵内においてはどのように位置付けられるのかについて、主に横穴室石室の構造やその規模に着目し、当古墳の実態を明らかにしたい。

（1）　白鳥塚古墳の横穴式石室と家形石棺の構造と年代

白鳥塚古墳は出土遺物が知られていないため、横穴式石室と家形石棺の既往の型式編年の研究をもとに、その特徴から築造年代を推定する。

横穴式石室の特徴と年代　畿内中枢部の編年では白石太一郎氏と太田宏明氏の研究を参考とする。

白石氏の型式編年では、白鳥塚古墳の横穴式石室は袖部のあり方からは平林式に比定でき、玄室の石積みからは天王山式の特徴をもつ（白石1999）。

平林式は奈良県平林古墳や同藤ノ木古墳の石室を指標とする。袖石に大型石材を用い、天井石まで１～２段を載せるのが特徴である。玄室の左右側壁は５段前後、奥壁は４段前後のものが多い。平林式の石室ではTK43型式の須恵器が出土している。

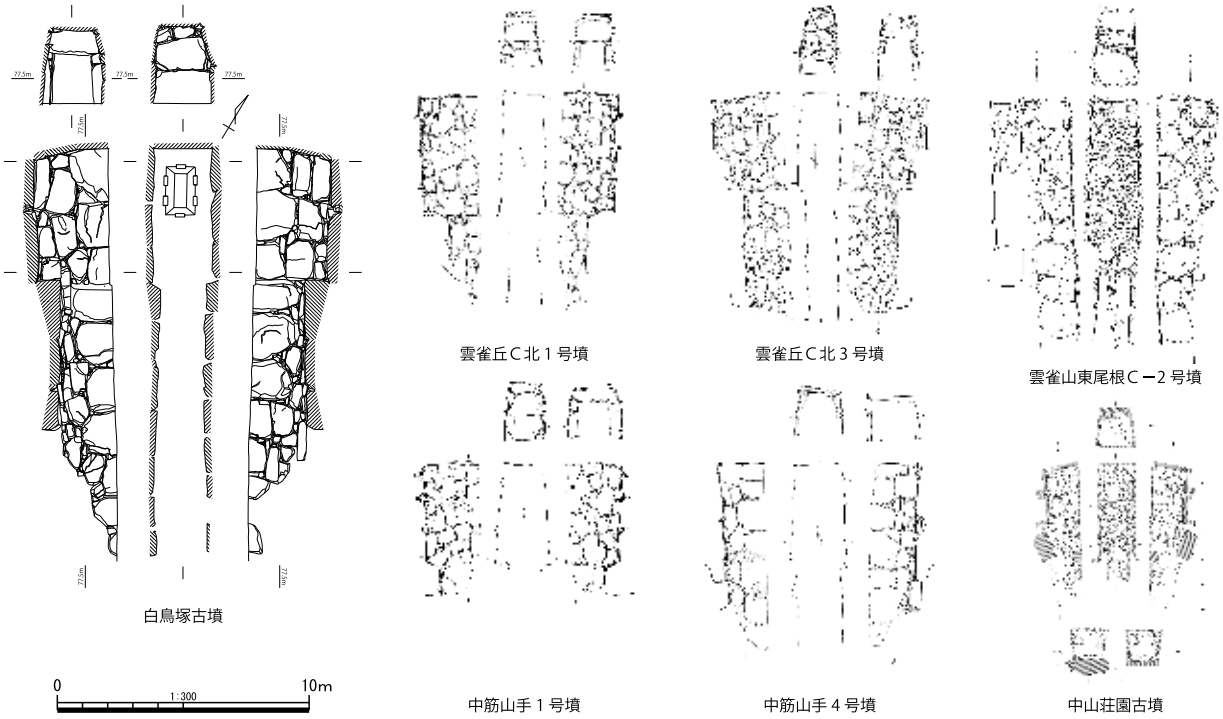


図27　白鳥塚古墳と長尾山丘陵の横穴式石室

天王山式は奈良県赤坂天王山古墳や同牧野古墳の石室を指標とする。袖石は１石で天井石を支えており、壁面にはまだ切石技法が用いられていないことに特徴を有する。石積みは、玄室の左右側壁は３～４段、奥壁は３段で構成される。天王山式の石室ではTK209型式の須恵器が伴う。

白鳥塚古墳の横穴式石室は平林式から天王山式へ中間的なものとして位置付けられる。

太田氏の編年観では、袖部と羨道側壁の様相から畿内型石室６群に当てはまる（太田2011）。６群は奈良県平林古墳、同烏土塚古墳、同赤坂天王山古墳などが代表例としてあげられている。袖部が天井石を直接支えない立石を採用し（S.3類）、羨道側壁は袖部の近い箇所において基底石が大型化する（S.S.4類）ことを指標とする。玄室側壁は縦と横の比率が同程度の石材を使用し、谷積みを行い（G.S.3類）、奥壁は石材の大型化がすすみ、１段を２～３石で構成するもの（O.3類）と１段１石のもの（O.4類）が認

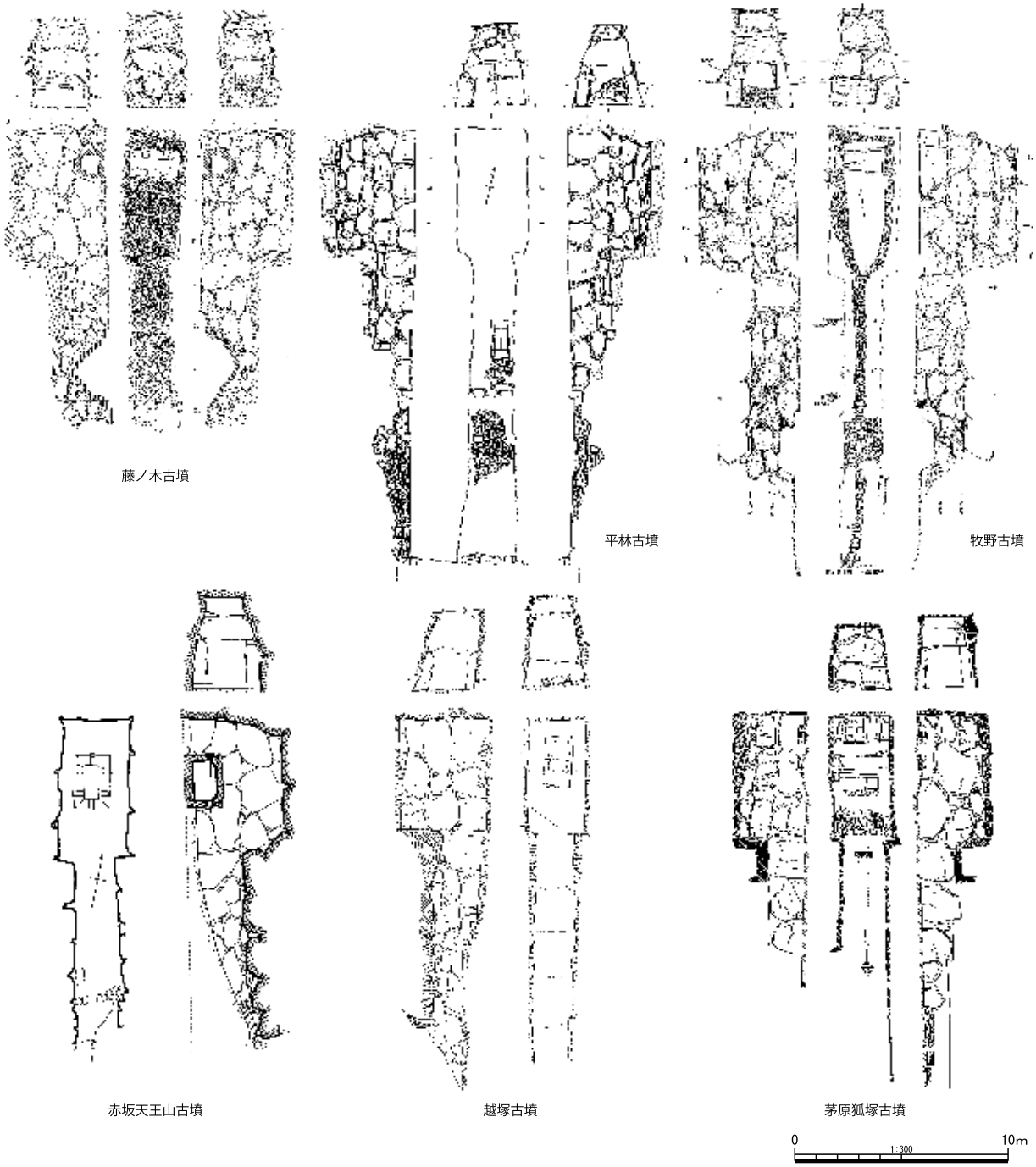


図28　大和の大型横穴式石室

められる。畿内型石室６群に属する石室ではTK43型式からTK209型式の須恵器が出土している。

白鳥塚古墳では奥壁の石積みを１段１石で構成するもの（O.4類）にあたり、その他の属性も合致する。

次に白鳥塚古墳の年代について言及している研究を取り上げる。

岡野慶隆氏は長尾山丘陵の横穴式石室に平面企画と構築技法から３つの系統を見出した。白鳥塚古墳の石室はその中でも主流となる系統に属するが、白鳥塚古墳の石室の場合は大和の大型横穴式石室との関係が考えられることから、必ずしも一つの系譜のなかにおさめることはできないとしている。石室の年代は岡野氏の設定するⅡ期の第３小期（６世紀末～７世紀初頭）に位置付けられている。

下原幸裕氏は近畿地方の終末期古墳を取り上げた中で、白鳥塚古墳の横穴式石室を７世紀初頭に位置付けている（下原2006）。

富山直人氏は、袖部と玄室の石積みに着目し、大和の平林古墳や越塚古墳、茅原狐塚古墳、石舞台古墳などの横穴式石室と対比させた。そして、白鳥塚古墳の築造年代を飛鳥編年のⅠに相当するか、それよりもやや遅れる時期に位置付けている（富山2016）。

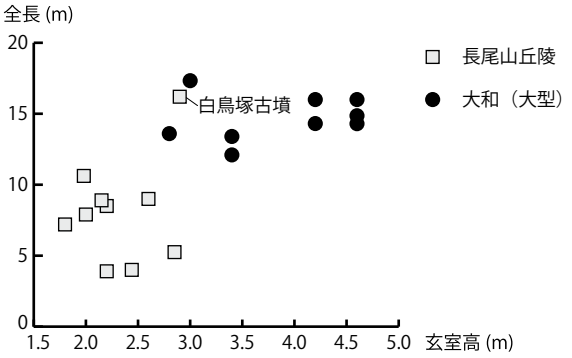
家形石棺の特徴と年代　家形石棺の編年は棺蓋の変化に着目した小林行雄氏の研究成果が基礎となり（小林1951）、その後は和田晴吾氏によって詳細な型の設定や石材、分布を考慮した研究がなされた（和田1976）。

和田氏の編年では、白鳥塚古墳の家形石棺は縄掛突起の数や突起の位置から刳抜1･2型式ｃ類にあたる。刳抜1･2型式は、刳抜式の家形石棺の棺蓋前後短辺に各１個、左右長辺に各２個の突起を有する畿内では典型的なものである。その中でもｃ類は平坦面指数が40以上あり、突起は蓋の垂直面におりてきており、突起の断面が長方形に定型化するものである。

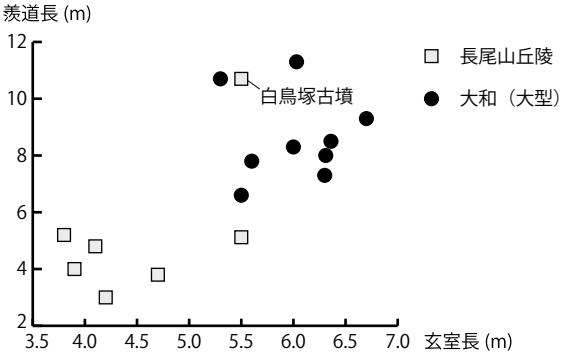
この型式の竜山石製石棺は奈良・大阪南部を中心として分布しており、その時期は６世紀末から７世紀中葉とされる。

増田一裕氏は縄掛突起の配置や付加位置・形状、上部平坦面、石材、棺の規模から５系統に分けて考える（増田1977）。白鳥塚古墳は第４系統にあたり、第Ⅲ期の中葉（６世紀後半頃）に位置付けらている。

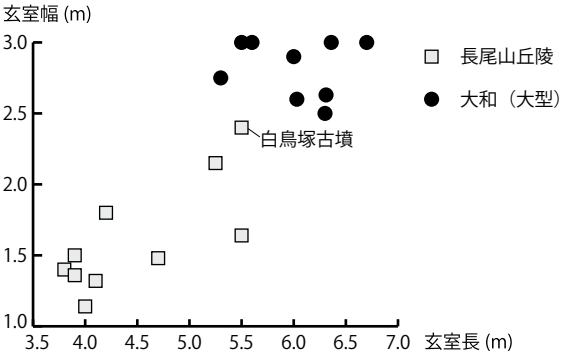
白鳥塚古墳の年代　白鳥塚古墳の築造年代は、横穴式石室の型式編年ではTK209型式期、家形石棺の編年からは６世紀末から７世紀中葉の範囲とみられる。よって、当古墳の築造年代は横穴式石室の特徴などからTK209型式期と考えられる。



1．石室の大きさの比較



2．玄室と羨道の長さの比較



3．玄室の大きさの比較

図29　横穴式石室の規模の比較

（2）　横穴式石室の規模の比較

白鳥塚古墳の横穴式石室は使用石材の大きさや石室の規模から、長尾山丘陵の中では突出した存在であるが、実際にはどの程度の違いがみられるのか。また大

和の大型横穴式石室と比較した場合にはどのように位置付けられるのか。石室の全長と玄室の高さをみた石室の大きさ（図29-1）、玄室と羨道の長さ（図29-2）、玄室の大きさ（図29-3）などから比較したい。

長尾山丘陵の中での比較　長尾山丘陵の横穴式石室では残存状態が良好であり、なおかつ規模の大きな石室を比較対象とした。玄室長が白鳥塚古墳のものと同等のものも中にはみられるが、石室の大きさ、玄室と羨道の長さ、玄室の大きさのいずれも白鳥塚古墳を越える規模の石室は認められない。

大和との比較　白鳥塚古墳と近接する時期に築かれた大和の大型横穴式石室を比較対象とした。規模が突出して大きな石舞台古墳などは表示していない。白鳥塚古墳の横穴式石室は、玄室に関しては大和の大型横穴式石室のものと比べると小さいが、おおむね比肩する規模を有していることがわかる。

規模による位置付け　白鳥塚古墳の横穴式石室は長尾山丘陵の中では最も大型であり、大和の大型横穴式石室に匹敵する規模を有する。

（3） 横穴式石室の構造の比較

白鳥塚古墳に近接する時期の横穴式石室を取り上げ、石積みの段数や配石数から類似する構造のものを検討した（表３）。年代の指標となる袖部のほか、奥壁、玄室側壁、羨道側壁、前壁にも着目した。

長尾山丘陵の中での比較　白鳥塚古墳の石室と比較すると、袖部と奥壁においては中筋山手１号墳が部分的に類似する。しかし、長尾山丘陵の横穴式石室は大型石材の使用が少なく、やや小型石材を多段積みする傾向を持つなど、白鳥塚古墳の石室とは様相を異にする部分の方が目立つ。

大和との比較　白鳥塚古墳の石室は大和の横穴式石室と全体的に類似する要素が多い。とくに越塚古墳とは玄室側壁の段数と配石数、羨道側壁の段数、前壁において、茅原狐塚古墳とは奥壁の段数と配石数、羨道側壁の段数、前壁において多くの共通性が認められた。

構造からみえる共通性　主に石室を構成する石材の段数や配石数に着目してみた結果、白鳥塚古墳の石室の構造は長尾山丘陵の横穴式石室よりも大和の大型横穴式石室の方に強い共通性が認められる。

表３　白鳥塚古墳と大和・長尾山丘陵の横穴式石室属性表

大和	袖石		奥壁 段数						奥壁 配石数				玄室側壁 段数					玄室側壁 配石数				羨道側壁 段数				前壁 段数		太田 分類
	上段	立石	5	4	3	2	1	小型石材	3	2	1	小型石材	5	4	3	2	小型石材	5	4	3	2	4	3	2	1	2	1	
平林古墳																										垂直		６群
赤坂天王山古墳								?				?														斜め		６群
牧野古墳																										斜め		７群
白鳥塚古墳																											垂直	(６群)
越塚古墳																											垂直	７群
茅原狐塚古墳																											垂直	８群

長尾山丘陵	袖石		奥壁 段数						奥壁 配石数				玄室側壁 段数					玄室側壁 配石数				羨道側壁 段数				前壁 段数		太田 分類
	上段	立石	5	4	3	2	1	小型石材	3	2	1	小型石材	5	4	3	2	小型石材	5	4	3	2	4	3	2	1	2	1	
雲雀丘Ｃ北１号墳	数段	?																以上									斜め	(６群)
雲雀丘Ｃ北３号墳	数段		以上										以上														垂直	(６群)
雲雀山東尾根Ｃ-2号墳	?																										?	(６群)
中筋山手１号墳																											斜め	
白鳥塚古墳																											垂直	(６群)
中筋山手４号墳																											弱	(６群)

（4） 白鳥塚古墳の位置付け

白鳥塚古墳の築造年代はTK209型式期と考えられる。長尾山丘陵の中では最も大型であり、大和の大型横穴式石室に匹敵する規模を有する。石室の石積みや段数などからみた構造では、長尾山丘陵の横穴式石室よりも大和の大型横穴式石室の方に強い共通性が認められる。

6世紀前半に勝福寺古墳が築かれたのち、6世紀後半以降になると長尾山丘陵に数多くの横穴式石室が構築されるが、勝福寺古墳のような首長墓墳はみられない。長尾山近辺では五月山南麓に前方後円墳で横穴式石室2基を有する二子塚古墳や、大型横穴式石室を有する鉢塚古墳がある。7世紀段階になって群集墳とはやや離れた位置に、大和との強い関係を持った白鳥塚古墳が築かれるのである。

当古墳の被葬者については、西摂地域において安定した勢力を持ち、畿内中枢部と密接な関係を持つ集団を率いた人物像であり、大型の竜山産の家形石棺が供給されているように、近接地域の豪族層とも広い交流を持つ被葬者の姿を想定されている（直宮2013）。また、白鳥塚古墳や八角形墳の中山荘園古墳の選地には風水思想との関係も指摘されており、両古墳は同族系譜を持つものと評価されている。その後、時期はくだるが両古墳に近接した位置から奈良時代の金銅製の蔵骨器をおさめた石櫃が確認されており、有力者の墓域として重要な地であったことがうかがわれよう。

引用・参考文献

網干善教　1959 「大和三輪狐塚古墳について」『古代学』第8巻第3号、古代学協会、pp.308-318

梅原末治　1938 「大和赤阪天王山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』三、日本古文化研究所（1974年復刊版）、pp.3-12

太田宏明　2011 『畿内政権と横穴式石室』、学生社

岡野慶隆　1989 「長尾山丘陵における横穴式石室－その企画法と構築技法－」『市史研究紀要たからづか』第6号、宝塚市教育委員会、pp.31-59

河上邦彦（編） 1987 『史跡牧野古墳』広陵町文化財調査報告第一冊、広陵町教育委員会

関西学院大学考古学研究会　1978 「長尾山の古墳群（Ⅰ）－中筋山手古墳群－」『関西学院考古』第4号、関西学院大学考古学研究会、pp.1-19

関西学院大学考古学研究会　1979 「長尾山の古墳群（Ⅱ）－雲雀丘古墳群－」『関西学院考古』第5号、関西学院大学考古学研究会、pp.1-16

小林行雄　1951 「家形石棺」『古代学研究』（上）第4号、pp.2-15、（下）第5号、pp.9-17、古代学研究会

下原幸裕　2006 『西日本の終末期古墳』、中国書店

白石太一郎　1999 「終末期横穴式石室の型式編年と暦年代」『考古学雑誌』第85巻第1号、日本考古学会、pp.1-18

伊達宗泰　1960 「桜井市粟原越塚古墳」『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）第3集』、奈良県教育委員会、pp.50-53

富山直人　2007 「西摂津の横穴式石室」『近畿の横穴式石室』、横穴式石室研究会、pp.77-87

富山直人　2016 「白鳥塚古墳測量調査報告」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』ニュースレター1号、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.15-19

直宮憲一　1980 「雲雀山東尾根古墳群C支群2号墳の調査」『長尾山の古墳群調査集報』宝塚市文化財調査報告第14集、宝塚市教育委員会、pp.10-28

直宮憲一・古川久雄　1985 『中山荘園古墳発掘調査報告書』宝塚市文化財調査報告第19集、宝塚市教育委員会

直宮憲一　2013 「中山寺白鳥塚古墳について」『中山寺の歴史と文化財』第一巻論文編、大本山中山寺、pp.173-191

奈良県立橿原考古学研究所　1990 『斑鳩藤ノ木古墳第一次調査報告書』、奈良県立橿原考古学研究所

坂　靖（編） 1994 『平林古墳』當麻町埋蔵文化財調査報告第3集、當麻町教育委員会

増田一裕　1977 「畿内系家形石棺に関する一試考」『古代学研究』（上）第83号、pp.23-36、（下）第84号、pp.17-27、古代学研究会

和田晴吾　1976 「畿内の家形石棺」『史林』第59巻第3号、史学研究会、pp.1-59

挿図出典　一部改変

図27：雲雀丘古墳群C支群北1号墳（関西学院大学考古学研究会1978） 雲雀丘古墳群C支群北3号墳（関西学院大学考古学研究会1979） 雲雀丘東尾根C-2号墳（直宮1980） 中筋山手1号墳（関西学院大学考古学研究会1978） 中筋山手4号墳（関西学院大学考古学研究会1978） 中山荘園古墳（直宮・古川1985）

図28：藤ノ木古墳（奈良県立橿原考古学研究所1990） 平林古墳（坂編1994） 牧野古墳（河上編1987） 赤坂天王山古墳（梅原1938） 越塚古墳（伊達1960） 茅原狐塚古墳（網干1959）

2　山本古墳群出土の陶棺

前田　俊雄

（1）　山本古墳群出土陶棺

大英博物館に所蔵されている陶棺片２点はいずれも須恵質のものである。博物館には共伴する遺物はなく、陶棺のみが保管されている状況である。ここでは各資料について、その詳細を述べていく。

１点（図30-１、図31-１）は身の受け部である。身の側壁上端の内面に粘土を貼り付け、蓋を受ける受け部とする。内外面はともに横方向のナデが施される。残存高10.6cm、残存幅13.2cm、器壁厚1.8cmをはかる。焼成は良好で灰色を呈する。おそらくゴーランドによる「Yamamoto　Dolmen 16/７/88」の注記がある。

もう１点（図30-２、図31-２）は身の底部である。底部には脚部が一部残存している。身の底部の調整は、内外面ともにナデである。脚部は身との接合部分のみが残る。身との接合分付近の脚部上端部には方形の透孔が外面方向に１箇所穿孔されているのが確認できる。脚部には回転ナデがほどこされる。身と脚部の接合方法は、脚部の外面は、接合部分に粘土をナデつける。それとともに脚部の内面には粘土を充填し、接合部分を補強する。焼成は良好で灰色を呈する。「Yamamoto Dolmen」の注記がある。

ここまで現在大英博物館で保管されている山本古墳群出土陶棺について、それぞれの製作技法やその特徴などについて記述してきた。ここからは製作技法や形態的特徴などを通し、これらの資料のもつ性格について検討をおこなっていく。

第一に山本古墳群出土陶棺の年代について検討をおこなっていく。陶棺の年代に関しては共伴遺物から決めていくことが多いが、本例では共伴遺物は確認されていない。そのため、陶棺自体のもつ特徴から年代を考える。そのうえで重要な要素には、身と蓋の組合せ部分の形状、脚の本数、突帯の本数などがある。本資料ではこれらのうち該当箇所が残る、身の受け部の形状から年代を検討する。本資料は、身の側壁上端の内面に粘土を貼り付け、蓋を受ける受け部とする。これ以上にはとくに造作は加えられていない。このような身の受け部の形状および製作技法は、須恵質陶棺の身と蓋の合わせ部分の形状の変化の中でも新しい段階に位置づけられる。このような身と蓋の合わせ部の形状をもつ例には大阪府茨木市・桑原西A3号墳出土陶棺（前田2008）や京都市・石見上里古墳出土陶棺（島田1926）などがあげら

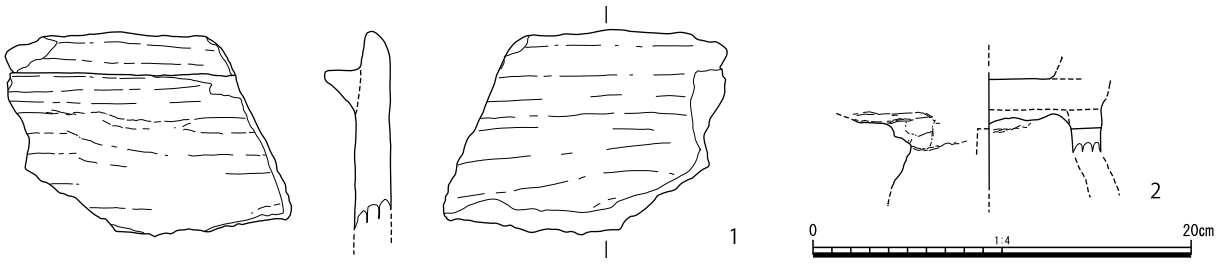


図30　山本古墳群出土陶棺片実測図（The British Museum 所蔵）

図31　山本古墳群出土陶棺片写真　（約１/５）（The British Museum 所蔵）

れる。これらの陶棺にはいずれも 7 世紀中頃の時期の土器が共伴している。このことから、身の側壁上端の内面に粘土を貼り付け、蓋を受ける受け部とする陶棺の時期は 7 世紀中頃を前後する時期のものであると考えられる。よって、山本古墳群出土陶棺も 7 世紀中頃の時期が想定される。

第二に山本古墳群出土陶棺の製作地について検討をおこなっていく。

現在近畿地方で確認されている須恵質陶棺の生産地は大阪府の陶邑窯跡群、千里窯跡群（桜井谷窯跡群・吹田窯跡群）といった大規模窯業生産地のほか、特定の須恵器窯などでも生産が確認されている。須恵質家形陶棺は地域ごとによく似た外見的特徴をもつものが製作されている。一方で、全体形状などの大きな視点で見ると、ある一定の範囲では共通点が認められるものもある。しかしこれらの類似する形態的特徴を有する陶棺も、微細な製作技法や調整技法には差異が認められ、そのうえその差異は地域ごとにまとまりがあるという特徴をもつ。このため陶棺自体の製作技法や調整技法、あるいは全体形状からその陶棺の製作地の想定がある程度は可能である。

本資料の特徴的な点に、脚部の方形透孔があげられる。陶棺の脚部の透孔は淀川流域を中心とした地域に分布する陶棺に多くみられる。それに対して陶邑窯跡群周辺や大和川流域などでは、脚部に透孔をもたない陶棺が優勢である。このような陶棺の脚部透孔の地域性のなかでも、方形透孔をもつ陶棺は豊中市金寺山廃寺（柳本・浅田2004）で確認されている。またこれ以外に円形ではない透孔をもつものとして、豊中市中井山 1 号墳（菱形）や同中井山 3 号墳（三角形）（柳本2005）があげられる。このような円形以外の特殊な形状の透孔をもつ陶棺は、桜井谷窯跡群周辺の陶棺の特徴といえるのかもしれない。

次に陶棺の製作技法および調整技法についてみていく。本陶棺は内外面ともにナデ調整がおこなわれており、身の受け部の製作技法については上で述べたとおりである。これらの製作・調整技法は近畿地方の須恵質陶棺に広範にみられるものである。

山本古墳群出土陶棺の製作地は、残存部位がきわめて限定的であるため判断する材料は少ない。しかしながら、わずかに残された手がかりから桜井谷窯跡群との関係性がうかがわれるものである。この点については桜井谷窯跡群と山本古墳群との地理的な近さからも認められる。

（2） 出土地の検討

大英博物館で保管されている資料には、その来歴を示すメモなどが添付されているものもある。しかし本資料については、“Yamamoto Dolmen” および調査日である “16/ 9 /88”（＝1888年 9 月16日）が陶棺に直接書かれている。そこで出土地を検討する際に重要な手がかりとなってくるのが、ゴーランドによる直筆の調査メモである（図８・９）。

ゴーランドによるメモでは、中山寺を起点とした古墳の位置関係が示されている。なお石室の大きさはゴーランドの報告によると玄室は長さが９フィート２インチ（約2.79m）、幅が５フィート６インチ（約1.68m）、高さが６フィート（約1.83m）、羨道は長さが21フィート３インチ（約6.48m）、幅が３フィート10インチ（約1.17m）、高さが５フィート（約1.52m）、全長が30フィート５インチ（約9.27m）となっている（Gowland1897）。またこれらの数値に加えて、調査メモによると全長は天井石の残っている部分までの長さで23フィート（約7.01m）である。

またこの陶棺を出土した古墳を考えるうえで重要な資料に、坪井良平による『酔古雑録』をあげることができる（坪井1914）（図32）。『酔古雑録』には「摂津國河邉郡中山以東池田ニ至ル石槨」と題して横穴式石室の図面が掲載されている。そのなかに「中筋村天満宮至東方街逆傍（封土ヲ認メズ）」と書かれた横穴式石室があるが、その断面には羨道部分に「陶棺破片アリ」と書かれている。この古墳はその地名から山本古墳群 C 支群中の古墳であると考えられる。この『酔古雑録』に記載されている古墳に

は石室の法量についても記載がなされている。それによると玄室は長さが９尺（約2.73m）、幅が５尺１寸（約1.55m）、高さが５尺１寸(約1.55m)、羨道は長さが14尺（約4.24m）、幅が３尺８寸（約1.15m）、高さが４尺６寸（約1.39m）である。これはゴーランドによる報告と全長（羨道長）および玄室高以外はきわめて近似した数値を示している。石室の計測値および「陶棺片がある」という記述から、ゴーランドが計測をおこない陶棺を採集した古墳は、『酔古雑録』に記述された古墳と同一、すなわち山本古墳群Ｃ支群中の古墳であると考えられる。なお石室の全長と玄室高の計測値の差異が生じる原因であるが、石室長については計測箇所の違いに起因するものと考えられる。ゴーランドが計測している天井石の残っている部分までの長さは23フィート（約7.01m）であり、これは『酔古雑録』の玄室の長さと羨道の長さを足した数値（23尺＝6.97m）にきわめて近い数値である。また玄室高の違いに関してはゴーランドが計測をおこなって以降さらに石室内に土砂が堆積した結果、または玄室内での計測箇所の違いであると考えられる。

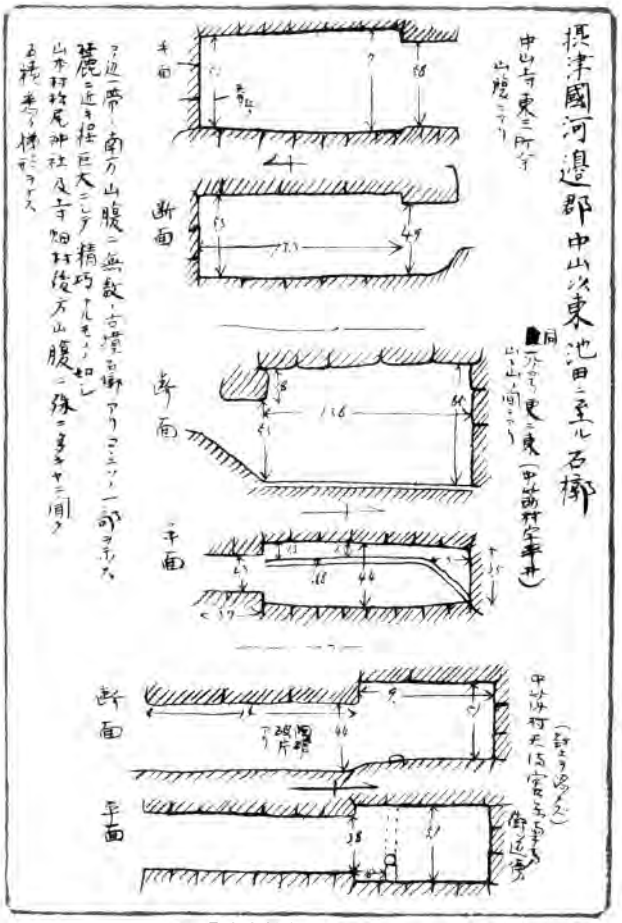


図32 『酔古雑録』（坪井1914）

このようにゴーランドが陶棺を採集した古墳は、山本古墳群Ｃ支群中の古墳の１つであったと考えられる。山本古墳群Ｃ支群にはかつて４基の古墳があったと想定されており（武藤・橋本1977）、これらのうち１基が現在も残されている。この古墳（C1号墳　天満神社古墳）の石室は、玄室幅が奥壁で1.7m、玄門部で1.82m、玄室長2.72m、高さが1.5～1.6mの玄室に、幅が玄門部で1.37m、開口部で1.11m、長さが右側壁で5.24m、左側壁で5.14m、高さが1.4～1.5m の羨道が付くものである。石室の計測データはゴーランドの報告とも近似し、測量当時にもこの古墳が、ゴーランドが記録を残した古墳である可能性も提示されている（関西学院大学考古学研究会1991）。

今回の調査ではゴーランドによる直筆調査メモから、開口方向や墳丘断面および墳丘と石室の位置関係などの情報があらたに得られた。その結果、ゴーランドが記録を残した古墳と天満神社古墳の類似性はきわめて高いことが判明した。ゴーランドが記録を残した古墳、すなわちゴーランドが陶棺片を採取した古墳は天満神社古墳であった可能性がきわめて高いと考えられる。

ただし解決しなければならない点も依然残されている。『酔古雑録』には陶棺出土石室に関しては、「封土ヲ認メズ」という記述がある。ゴーランドの調査メモに描かれた石室図には墳丘が描かれており、また天満神社古墳には現在も墳丘が残っている。

この点は陶棺出土古墳が天満神社古墳と確定させるために解決させる必要がある。一方で『酔古雑録』の「封土ヲ認メズ」という記述に関しても再検討する必要がある。『酔古雑録』に描かれている石室図は、天井石や壁面の石材の表現をみるときわめて整っており、石材の抜き取りなどによる破壊を受けた痕跡は見受けられない。墳丘がない状態で石室石材の抜き取りがおこなわれないということは考えにくい。もちろん『酔古雑録』中の図面が石材の数と計測値を表現しただけのものであり、石室の現状

表 4　横穴式石室の計測値の比較

	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅	羨道高	全長
Yamamoto Dolmen	2.79	1.68	1.83	6.48	1.17	1.52	9.27
酔古雑録	2.73	1.55	1.55	4.24	1.15	1.39	6.97
天満神社古墳	2.72	1.7	1.5〜1.6	5.24	1.11	1.4〜1.5	8.16

Yamamoto Dolmen は feet から、酔古雑録は尺寸からの換算　　単位：m

を示したものではないのであれば、実際に墳丘が失われ石室が露出した古墳から陶棺が出土したということになるのであろう。この「封土ヲ認メズ」という記述に関してはどのような状態をあらわしているのか、今後ともさらなる検討が必要である。

（3） まとめ

ここまで大英博物館に保管されている山本古墳群出土の陶棺について記してきた。陶棺はその形状から 7 世紀中頃の時期が想定される。またその製作地については、桜井谷窯跡群周辺地域との類縁性が強く感じられるものである。この製作地に関しては、中井山古墳群との地理的な関係を鑑みても、大きく齟齬をきたすものではない。

また出土古墳に関しては、ゴーランドの残した調査の記録や日本に残されたさまざまな資料から、兵庫県宝塚市に所在する天満神社古墳であった可能性が高いとした。しかしまだ検討すべき点も残されている。陶棺出土古墳の検討については、今後も継続していく必要がある。

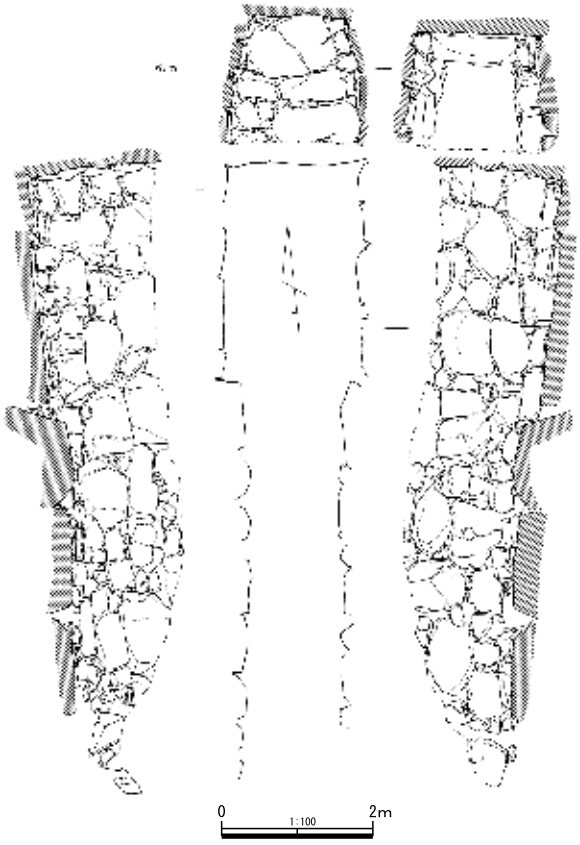


図33　天満神社古墳石室実測図
（関西学院大学考古学研究会1991）

引用・参考文献

関西学院大学考古学研究会　1991 「長尾山の古墳群（Ⅴ）－天満神社古墳－」『関西学院考古』第 9 号、関西学院大学考古学研究会、pp.13-22

絹畠　歩　2013 「古墳時代後期から終末期における陶棺の分類・編年と系譜」『古代学研究』198、古代学研究会、pp.1-24

島田貞彦　1926 「山城国乙訓郡大原野村発見の陶棺と其遺跡に就いて」『歴史と地理』第18巻第 4 号、史学地理学同好会、pp.52-60

坪井良平　1914 「摂津国河邉郡中筋村及寺畑村石槨」『酔古雑録』第 2 版（1955年復刻版）、pp.140-142

ハリス , ヴィクター・後藤和雄（編） 2003 『ガウランド　日本考古学の父』、朝日新聞社

前田俊雄　2008 「A3号墳」『桑原遺跡－安威川ダム建設事業に伴う桑原地区の調査－』大阪府埋蔵文化財調査報告 2007-4、大阪府教育委員会、pp.23-28

武藤誠・橋本久　1977 「考古編」『宝塚市史』第 4 巻資料編Ⅰ、宝塚市、pp.67-206

柳本照男　2005 「太古塚古墳群」『新修豊中市史』第 4 巻考古、豊中市、pp.355-364

柳本照男・浅田尚子　2004 『金寺山廃寺第 1 ・ 2 ・ 3 次発掘調査報告書』豊中市文化財調査報告第54集、豊中市教育委員会

Gowland, W., 1897. The Dolmens and Burial Mounds in Japan. *ARCHAEOLOGIA*, Vol.LV, pp.439-524

第Ⅳ章　まとめ

白鳥塚古墳　両袖式の大型横穴式石室に、竜山石製の刳抜式家形石棺を有する。横穴式石室の開口方向はS-33°-Eで、ほぼ南東方向である。石室の規模は現存長が16.2m、玄室は長さ5.5m、幅は奥壁付近で2.3m、中央付近で2.4m、玄門付近で2.5m、高さは奥壁付近で2.9mである。羨道は長さ10.6m、幅は玄門付近で1.8m、開口部付近で２m、高さは玄門付近で２mである。袖部幅は右側壁側で35㎝、左側壁側で39㎝である。

家形石棺は、棺蓋に断面が長方形の縄掛突起が、短辺に各１個、長辺に各２個の計６個ある。身部長180㎝、身部幅106㎝、身部高66㎝、蓋部長190㎝、蓋部幅116㎝、蓋部高49㎝、蓋部平坦面長135㎝、蓋部平坦面幅50㎝、縄掛突起は長辺37㎝前後、短辺16㎝前後である。平坦面指数は43である。

白鳥塚古墳の位置付け　築造年代は横穴式石室の特徴などからTK209型式期と考えられる。周辺の長尾山丘陵の中では最も大型で、さらに大和の大型横穴式石室に匹敵する規模を有する。石室の石積みや段数などからみた構造では、長尾山丘陵の横穴式石室よりも大和の大型横穴式石室の方に強い共通性が認められる。

山本古墳群　大英博物館所蔵ゴーランド調査記録に５基の横穴式石室墳が記載された「山本古墳」（詳細な記述は２基）のうち、陶棺の破片２点が採取された横穴式石室墳は、兵庫県宝塚市に所在する天満神社古墳であった可能性が高いことを確認した。陶棺はその特徴から７世紀中頃の時期と想定され、製作地については桜井谷窯群と推定する。

ゴーランドの調査・研究　今回の白鳥塚古墳調査の結果とゴーランドの調査記録を照合し、あらためてその調査精度の高さを確認した。石積みの特徴など、観察視点と記述の確かさについても注目される。ゴーランドは横穴式石室（Dolmen）を平面形と立面形から４つのグループに分けている（上田校注 / 監修・稲本訳1981）。白鳥塚古墳と山本古墳群の横穴式石室はその記述の中には現れないが、今でいう両袖式が中心となる第３グループに位置付けられる。

山本古墳群出土の陶棺片に関しては、自ら入手した桜井谷の完形の陶棺から同定しており、多角的な観察視点を提示している。

こうした膨大かつ詳細な横穴式石室や出土遺物の検討からゴーランドがどのような研究成果を導き出していたのか、公刊された論文からだけでは把握することはできない。今後の本調査研究プロジェクトの課題の一つである。

引用・参考文献

上田宏範（校注 / 監修）・稲本忠雄（訳）　1981　『日本古墳文化論－ゴーランド考古論集』、創元社

兵庫県宝塚市

白鳥塚古墳・山本古墳群

－ゴーランド調査古墳の研究 1 －

ゴーランド・コレクション調査研究報告書　第 1 号

発行年月日　2017年3月

発　行　ゴーランド・コレクション調査プロジェクト
（代表　一瀬和夫　京都橘大学文学部教授）
〒607-8175　京都市山科区大宅山田町34　京都橘大学

印　刷　株式会社　天理時報社
〒632-0083　奈良県天理市稲葉町80番地